

畿央大学現代教育研究所 令和2年度 成果報告書

「教師としての資質能力を育てる」

～学校の教育力向上のための戦略的研究～

Vol.9

CONTENTS

- I プロジェクト研究 2020年度 成果
- II 「学びを結ぶ」オンラインセミナー報告
- III 資料

KiO University

刊行にあたって

2012年に開所いたしました畿央大学現代教育研究所では、2年目からプロジェクト研究に取り組んできました。プロジェクト研究では教育の現代的課題を具体化し、現職教員との連携し大学の研究リソースと現場の実践リソースが協働するテーマ、あるいは大学教員がそれぞれの研究領域で協働できるテーマで研究活動に取り組んできました。

2019年度からは「教師としての資質や能力を育てる～学校の教育力向上のための戦略的研究～」第3期の活動に入り、教育の現代的課題でもある「特別支援教育の充実」「教育の情報化」を指定課題とし、さらに5つのプロジェクトを展開しています。

本来今年度は、2019年度幼稚園・保育所・認定こども園の教育要領、保育指針の完全実施に引き続き、小学校においては改訂学習指導要領の目標と内容、その考え方に基づく評価の完全実施の年であり、育成を目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進、各学校における仮クラムマネジメントの推進などが試みられる年でした。現実にはCovid-19対策のための休校措置と休校期間中の授業時間保障と改訂指導要領が求める授業の質の改善とは距離がある課題が先行しました。

本研究所のプロジェクト研究も課題によって停滞を余儀なくされ、ワークショップは時期をずらしてのオンラインセミナー形式での実施になりました。

本書では、こうした状況下での研究活動の経緯を報告させていただきます。課題を抱えながら歩を止めない研究成果をご一読いただき、本書の内容のどこかにお読みいただいた皆様が同じ課題に取り組むてがかりを見付けていただければ幸いです。

目次

刊行にあたって

I プロジェクト研究報告

| | |
|---|----|
| 指定課題1「大学・公立学校・教育行政の連携に基づく特別支援教育に関わる専門的知見の普及を標的とした研修プログラムの開発と効果検証」 | 1 |
| 指定課題2「教科学習におけるプログラミングに関する事例研究」 | 3 |
| 公募研究1「生涯教育段階からみた幼大連携と変容する教育者の役割」 | 5 |
| 公募研究2「図画工作科授業における導入の在り方」 | 10 |
| 公募研究3「箒の指導のための教師教育プロジェクト」 | 20 |
| 公募研究4「社会科における地図活用を視点とした防災教育の系統性に関する研究」 | 22 |
| 公募研究5「ダイバーシティ教育を視野に入れた外国籍児童に関わる教育の基礎的研究」 | 23 |
| II 「学びを結ぶ」オンラインセミナー 報告 | 28 |
| III 資料 | 42 |

I プロジェクト研究報告

指定課題1

大学・公立学校・教育行政の連携に基づく特別支援教育に関わる専門的知見の普及を標的とした研修プログラムの開発と効果検証

研究代表者 大久保 賢一 (畿央大学教育学部准教授)

研究分担者 小野 尚香 (畿央大学教育学部教授)

稲本 正法 (畿央大学教育学部教授)

1 本研究のねらい

本研究の目的は、地域の学校における特別支援教育の充実を目指し、学校・教育行政・大学間の連携を通して専門的知見の普及を標的とした研修プログラムを開発し、その効果を検証することである。本年度は、前年度に引き続き大学、市教育委員会、そして各学校との連携体制をさらに密にし、具体的な研修計画を策定し予備的实践を行い、研究目的を達成するための足がかりとすることを目指した。最終的に本研究においては、1) 学校の研修ニーズの同定、2) 研修内容の選定や研修手続きの考案、3) 市全体における研修資料のアーカイブ化と活用システムの構築、4) 研修システムの成果検証、の4点を目的とする。

2 活動報告

前年度において大学側の人的リソースに限りがあることから、本プロジェクトにおいては市内全体で研修を展開するのではなく、特定の学校において集中的に実践と検討を行い、方法論や研修資料などのコンテンツを集積し、やがては市教委主導で市内全体の研修を展開していくという方向性が確認された。なお、本年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初計画を縮小して実施することとなった。

(1) 香芝東中学校における事例検討会

1) 第1回：2020年11月4日(水)

目的：学年団における事例検討、香芝市における特別支援教育に関わる研修の実態やニーズに関する情報の集約、研修プログラム委の開発、および次年度以降の研修計画の立案

スケジュール：13時40分～16時10分に授業参観および事例検討を行った。

会場：香芝東中学校

2) 第2回：2021年2月10日(水)

・第2回も同様の目的・スケジュールで実施する予定である。

3 今後の予定

上述した2回的事例検討会が終わった段階で、大学、中学校、市教育委員会の3者間で振り返りを行い、研修に関する教材、様式、進め方、参加者の意見・感想などを検討し、改善案を模索する。今年度はさらに市内の他の3中学校の特別支援教育や生徒指導の担当者も参加しているので、本プロジェクトの成果を市内

の多くの学校に展開していくための方略についても検討する。また、香芝東中学校においては事例検討型の研修以外に開発する研修バリエーションを拡大させるため、次年度以降の展開についても関係者で協議する予定である。

指定課題 2

「教科学習におけるプログラミングに関する事例研究」

研究代表者 西端 律子（畿央大学教育学部教授）

1 小学校におけるプログラミング教育と本実践研究のねらい

今年度から実施されている小学校学習指導要領では「プログラミング教育」が位置づけられた。総則において「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動」を計画的に実施することと明示され、算数、理科、総合的な学習の時間が例として挙げられた。このことを受け、教科書においても、算数（1年～6年／6社）、理科（6年／6社）、図画工作（5,6年／1社）、家庭（5,6年／1社）、外国語（5年／1社）にプログラミングに関わる部分が掲載されている¹⁾。

また、「小学校プログラミング教育の手引」では、以下の6つに分類しているが、その中でも、AとBについては、「各教科等での学びをより確実なものとするための学習活動としてプログラミングに取り組む」ことが説明されている。

A：学習指導要領に例示されている単元等で実施するもの

B：学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの

C：教育課程内で各教科等とは別に実施するもの

D：クラブ活動など、特定の児童を対象として、教育課程内で実施するもの

E：学校を会場とするが、教育課程外のもの

F：学校外でのプログラミングの学習機会

香芝市立真美ヶ丘西小学校でのプログラミング実践も2年目にあたるため、上記分類の「B」にあたる実践研究を行うこととした。なお、今回は、実践者とも相談し、「世の中のながれ」を学ぶ社会科をとりあげることにした。

2 香芝市立真美ヶ丘西小学校での実践

(1) 実践の概要

日時：令和2年11月19日（木）第5校時（13:35～14:20）

対象：5学年3組 28名

教科・単元：社会科・私たちの生活と工業生産「自動車をつくる工業」

本時のねらい：Scratchによる自動車開発から、開発者の思いや努力についてかんがえることができる。

授業の流れ：

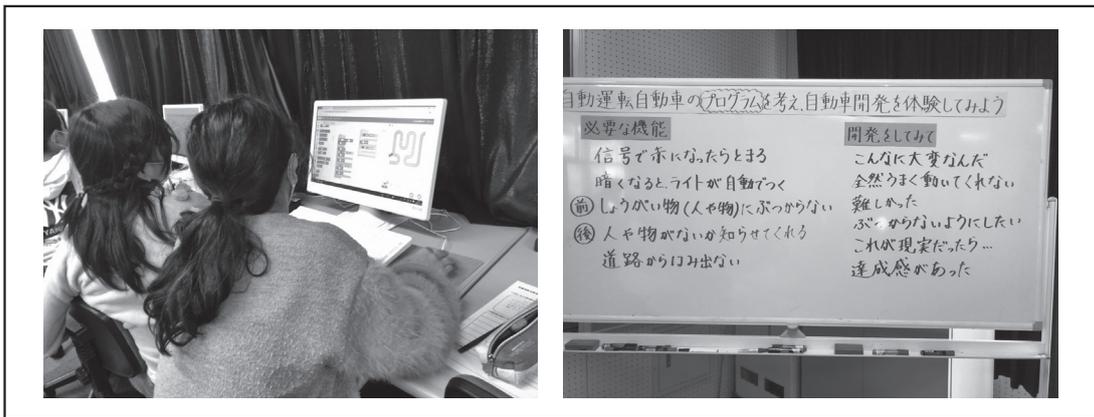
- ①自動運転自動車の動画を視聴する。
- ②めあて「自動運転自動車のプログラムを考え、自動車開発を体験してみよう」
- ③Scratchを操作し、自動運転自動車を作る。

④児童運転自動車のプログラミングから開発者の思いに気づく。

(2) 実践の様子

実践者が、Scratchの背景画像と車画像を用意し、道路を模した灰色の曲線にそって、「車」が動くように子どもたちがプログラミングを行った。また、途中で、鹿が飛び出てきた場合は、車を止めることとした。

真美ヶ丘西小学校は、二人に1台のタブレット端末が整備されており、相談しながら、プログラミングを行っていた。プログラミングに20分ほどかけ、すべてのグループでプログラミングが完成した。なお、28人中1人のみ、プログラミングが得意な児童がおり、授業で求められている以上のプログラムを完成させた。



3 小学校プログラミング教育の課題

A分類については、教科書に記載があるため、それに沿った指導が可能であるが、B分類については、実践を蓄積していくしかない。また、プログラミング教材も、アンプラグド形式、ビジュアルプログラミング、フィジカルプログラミングなどがあり、それぞれに特徴があり、必要な教材や環境も異なる。

さらに、各教科、各学年でどのようにプログラミングの実践を行っていくのか、また、プログラミング部分をどのように評価するのかについては、各地で実践の蓄積がなされている段階で、全国的な課題と言えよう。

現学習指導要領が告知されて数年になる。研修により、プログラミング教育についても少しずつ広まっており、また、GIGA スクール施策で環境も整いつつある。今後、さまざまな教科において、児童の発達段階や興味・関心に応じたプログラミング教育が展開できるよう、さらに実践を積み重ねる必要がある。

注

1) 小学校を中心としたプログラミング教育ポータル「2020年度から使用される教科書の中のプログラミング」<https://miraino-manabi.jp/content/404>

公募研究 1

「生涯教育段階からみた幼大連携と変容する教育者の役割」

| | | |
|-------|------------|---------------|
| 研究代表者 | 前平 泰志 | (畿央大学教育学部教授) |
| 研究分担者 | 柏井 みづほ | (畿央大学教育学部教授) |
| | Randy Muth | (畿央大学教育学部准教授) |
| | 永渕 泰一郎 | (畿央大学教育学部准教授) |
| | 横山 朋子 | (畿央大学教育学部准教授) |

1 本研究のねらい

昨年度の報告書でも述べたように、本研究のねらいは、ひと言でいえば、乳幼児期の子どもの教育において、幼稚園教諭、保育士、保育教諭、幼児教育の実習学生、保護者、地域の住民等にとって、教育者としてかわるとはどのようなことか、またそこにおいて大学は何ができるのか、を様々なアプローチから検証していくことであった。今年度は、当初予定していたフィールド研究がほぼ不可能になったために、今年度を次年度の本格的な研究をスタートさせるための準備段階と位置付けなおし、あらためて本プロジェクトでの問題意識の共有を図ることにした。

今回は、研究チームで掲げていた6つの研究トピックのうち、(v) 幼児教育施設の大学への開放と大学の幼児教育施設への開放の具体的なあり方—— に関わって検討した結果、現状を把握するために、大学付属の幼児教育施設(幼稚園、認定こども園、保育(所)園)に幼大連携に関するアンケートを次年度に実施することにし、その内容についての精査を行うこととした。以下の(1)～(6)はそのまとめである。

またプロジェクト研究と関連して、研究分担者の永渕 泰一郎が、奈良県主催の「奈良っ子はぐくみプロジェクト」の一環として2021年1月16日・17日のワークショップと講演会を行う機会があった。許可を得てその講演内容の骨子を要約して付論として掲載する。

(1) はじめに

大学付属の幼稚園・認定こども園・保育所(園)(以降、園と表記する)は、全国に多数存在する。大学付属の定義はここでは問わないとしても、関西圏に限っても、国公私立を問わず、大学と幼児教育施設が同一法人で経営されている園は、幼稚園(48園)、認定こども園(23園)、保育所(園)(6園)があり、合計およそ80園を数えることができる。地元奈良県に限って言えば、幼稚園が6園、保育所(園)2園が少なくとも該当する。現時点では、大学付属認定こども園は奈良においては存在していない。(畿央大学の付属認定こども園が創設されれば、奈良県において初めての大学付属認定こども園が誕生することになる。)幼稚園と保育所(園)を統廃合して新たなこども園が創設される現在の動向からいえば、この数字は固定されたものではないものの、大学付属の幼児教育施設がこのように多く点在していることに驚きを隠せない。

だが、一体大学と園はどのような関係にあるのだろうか。「幼大連携」とひと言で言っても、大学と園は何に重点をおいて連携を行っていくことを考えているのだろうか。個々の連携の状況については、学会や研究会、講演会、ホームページなどで個別に知ることができるものの、全体的な状況を総体として把握できる資料やそれを基にした研究成果は管見の限り見当たらない。従って、私たちの現在のプロジェクトにおいて、まずは大学付属の幼稚園、認定こども園、保育所(園)にアンケートを送付することにし幼大連携の実情を

知ることにした。アンケート実施は2022年度に行う予定にしている。

(2) 幼大連携の目的

確かに、大学は教員、研究成果と機器・機材、学生など多くの「資源」が集積されている。これまで十分に活用されていない資源を幼児教育の領域に投下することで、大学と園、双方にメリットが生じる可能性があることは予想される。

だが、その反面、デメリットとは言えないまでも、注意すべき論点はいくつか指摘しうる。近年、発達心理学や脳科学をはじめとする乳幼児期解明に欠かせない分野の研究が急速に進んできている。大学付属とは名ばかりの園の場合、このような成果を現場の実践に直接反映させることは、困難であろう。研修会の重要性はこのような動向と無関係ではない。また、連携という名の大学の「介入」が過剰であると、園固有の教育や保育の実践が自立性を損なう恐れもないとは言えない。また、保護者の意識や地域の連携とかい離する場合も出てくるだろう。付属の園は、学生の教育・保育実習の受け入れ先として恩恵に与っており、園の側から考えても、新しい研究や実践の息吹を大学から学ぶことも大いに学習されてよいはずであるが、実態はどうであろうか。

また、運営理念をとってみても、大学の理念的な影響が色濃く編成されている園もあれば、そうでない園もあり、多種多様である。大学の理念が実践にどの程度反映されているかを、実際の連携の具体的な在り方を尋ねるなかで明らかにしていきたい。

たとえば、年1回の保護者向けの教育講演会に大学教員を講師として迎えるだけでそれ以外の協力はほとんどない園、大学から美術・音楽などの専門家が定期的に赴き子どもたちの教育に関わっている園、年間計画や月案の作成等を大学教員と園が協力して行ない園内研修会を定期的に行っている園等、多様な連携が考えられる。

連携の在り方を考えるに当たっては、子どもの立場、保護者の立場、保育者の立場、園経営の立場、大学教員の立場、大学組織の立場など、多様な側面から考える必要があり、一つのアンケートの結果集計のみでその全貌を明らかにすることはできない。同じ設問に対しても、回答者によって、回答は異なることが予想される。今回のアンケートは、施設長あるいは園で回答出来る立場にある人から回答を回収し、分析することを念頭において考えている。以下は、具体的なアンケート内容に落とし込む前の私たちの現段階の現状分析である。

(3) 教育面からみた幼大連携

大学の日々の活動には、主として教育と研究の二つの側面（地域貢献を含む場合もあるが）があるので、それぞれに従って幼大連携の具体的なあり方を検討しながら、アンケートの質問内容を考えていきたい。

園の運営には、前述のように大学の専門知識が役立つことは言うまでもない。園の年間計画は、ほとんどの場合、5領域（健康、人間関係、表現、環境、言葉）と食育、安全、地域連携を柱にして立てる。大学には、専門領域の最新の知識を園に提供し、カリキュラムや日々の保育に活かすことができる。

他方、学生の教育の面からの貢献も見逃すことができない。幼児教育の現場（フィールド）は、大学の授業で培う理論的な知識を実践の場において体験に変換する機会を与えるものであり、教育方法、幼児の段階的な成長、また様々な場面における現場での対応などを、実際に観察し、ともに学ぶことができる。そのことは、幼稚園教諭や保育士を目指している学生にとって重要な経験になることであろう。従って、大学側の

カリキュラムと幼児教育の現場における教育方法などの取り組みの整合性や連携は望ましいものであり、本研究を通して幼大連携における連携の一貫性ある体制をどのように構築するかということも、本研究の重要な課題になるであろう。

具体的なアンケート設問の提案内容を以下に挙げておく

- ・大学の幼児教育カリキュラムと園との関連性
- ・大学教員と園の教職員の具体的な関わり方
- ・大学や園でのワークショップ、講演会などを通して、相互関係の築き方
- ・大学と園の地理的關係
- ・園の運営等に関する大学の関与（例：施設長を大学教員が兼任しているかどうか）
- ・幼大連携の有無、頻度、具体的な方法・内容
- ・園教職員の要望（教育・保育の質の向上のために、どのような連携が必要と考えるか）

（４）学生との関係

学生と園との関わり方は、フォーマル・インフォーマルな形式で行うようなことができる。園の側からみた学生の受け入れと学生の側からみた関わり方についての双方の視点からの現状把握をすることで、園教職員、大学教員、学生にとってよりよい連携の在り方を検討したい。

学生の側から言えば、教育・保育実習に参加するのみならずボランティア、学外活動やイベントなどの参加により、学生は大学、園や自治体と親睦を深め、コミュニティーの帰属意識を育てることが可能になる。本研究では、大学、園や自治体の行事、イベントにどの程度学生が参加可能を明らかにする。

- ・実習受け入れの有無（他大学の実習生も含め）
- ・受け入れを行っているのであれば、年間の回数、人数、受け入れによるメリット・デメリット
- ・実習以外の学生受け入れの有無
- ・受け入れを行っているのであれば、頻度、受け入れによるメリット・デメリット
- ・園の要望（どのような方法、内容で学生の受け入れを実施したいと考えるか）
- ・園で学生が関わる行事などがどのようなものがあるか
- ・学生の役割はどの程度にするか
- ・学生の募集方法

（５）保護者との連携

幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針には保護者とともに子どもを育てることが必要であると書かれている。一部の保護者はこのような考えをもっておらず、子どもの教育は園に一任しているという考え方が強い。特に保護者にこの考え方を払拭してもらうには、どのようにすればよいかを考える。

この目的を達するために園は何をしているのだろうか。そのためには、まずは、園でのこどもの活動の実態を当の保護者に知ってもらう必要がある。保護者自身への意識づけとして多くの園で行なっているのは、教育講演会である。それ以外にも、保育の目的を理解してもらうことを意識し毎月の「おたより」を出している園がある。また、食育の一環として、毎月保護者が交代で子どものおやつ作りをする園もある。その実態と効果について調査してみたい。

(6) 大学との研究面

幼大連携は、研究者と研究対象となる幼児教育現場が親密な関係を築くことができ、より有効的な研究活動を可能にする。幼大連携における研究、教育方法、幼児における精神的、また身体的成長などへの関心は、様々な研究活動を刺激し、新たな知識を生み出すという利点があり、その結果、相互に利益をもたらすことができる。そのために、大学側での研究活動運営の体制や幼児教育現場側での協力体制を整えることは不可欠であろう。幼大間研究活動の内容、研究協力体制について、幼大間研究活動に関する課題などアンケートで尋ねる項目は少なくない。

付論「イタリアのレッジョ・エミリア幼児教育から子どもの意欲や感性の育み方を学ぶ」

永渕 泰一郎

(1) レッジョ・エミリアの概要

レッジョ・エミリアは北イタリアの都市の名前であり、レッジョ・アプローチはアートを中核にした子どもの学びの可能性と子どもの権利を実現するための教育実践としてヨーロッパ諸国・アメリカでも知られることになり、1991年にニューズウィーク誌で「世界で最も優れた教育」と絶賛されたことから全世界に知られるようになる。レッジョ・エミリア幼児教育の歴史は第2次世界大戦終了後からはじまる。創造と共同を重んじ、最も根本的な街の再生は乳幼児教育からと考えた。最初の幼児学校は男女問わず全市民からの労働力を確保し手作りされる。ちょうどその時に教育学者のローリス・マラグッツィが合流し、幼児教育実践がはじまった。子どもを中心に考える社会の構築として、子どもは人としての存在し、子どもの権利を持ち、可能性への畏敬のある存在ととらえている。子ども・教師・調理師・用務員・保護者・地域住民の運営に携わる「誰もが主人公」と考える。そこに協同（共同）実践の要があり共主体としてのつながりがある。

(2) 100の言葉哲学

『でも、100はある』 —ローリス・マラグッツィ— 訳：田辺敬子（！）

子どもには 100 通りある。 子どもには 100 の言葉 100 の手 100 の考え 100 の考え方 遊び方や話し方 100 いつでも 100 の 聞き方、驚き方、愛し方 歌ったり、理解したりするのに 100 の喜び 発見するのに 100 の世界 発明するのに 100 の世界 夢見るのに 100 の世界がある。(それからもっとももっとも) けれど 九十九は奪われる。学校や文化が 頭と体をバラバラにする。そして子どもに言う 手を使わずに考えなさい 頭を使わずにやりなさい 話さずに聞きなさい ふざけずに理解しなさい 愛したり驚いたり 復活祭とクリスマスだけ。そして子どもに言う 目の前にある世界を発見しなさい そして100のうち 九十九を奪ってしまう。 そして子どもに言う、遊びと仕事 現実と空想 科学と想像 空と大地 道理と夢は一緒にはならない ものだ。つまり 100 なんかないと言う。 子どもは言う でも、100はある。

『でも、100はある』を通して教育の難しさと子どもの尊厳と子どもの意欲について語った。レッジョでは、あらゆる表現法を“言葉”と言いあらわしている。踊りや音楽という言葉、絵画や造形という言葉、話し言葉や沈黙という言葉等。子どもは、話し言葉だけでなく、たくさんの“言葉”（表現）を使う存在ととらえている。そして、市民感情・子ども観としては、子どもは尊重すべきひとりの市民であると主張している。

そのために子どもの“言葉”に耳を傾けその意味を見いだし、他の市民へとつなげていくことをスローガンに掲げている。

(3) 保育実践の要

保育に関わるのは保育者以外にアトリエリスタ（芸術士）とペタゴジスタ（教育学者）が関わるが、直接保護者や地域の人々も積極的にかかわりを持つ。アトリエリスタは1960年代から子どもの想像性を豊かにする大切な専門家として幼児学校に1人ずつ配置が決まった。ペタゴジスタは地域のエリアごとに乳児保育所と幼児学校の5・6園を1人が担当している。実践と理論の橋渡しをするためにミーティングを持ちながらそれぞれがかかわりあっている。

(4) 10ヶ月の事例～自ら学び成長する～ 「時計の不思議」から学ぶこと

乳児期から子どもは仮説を立てる。どれだけ我々の子どもに対する固定概念を変えることができるかが問われる。子どもに耳を傾ける保育は保育者も学び手になることである。科学とアートを分けたのは大人であり子どもにとっては一体と主張している。そんなアート活動から教育観を変えていく。

(5) 地域環境

レッジョ・エミリアでは“表現”として芸術活動に重きをおいている。それはレッジョ・エミリアの街がマックス・マーラーなど、デザインブランドの本拠地だったということも関係している。しかし育てたい子どもとしては「将来その技術が役立つ」というのではなく「今、周りの人とつながるもの」を大切に育てるために取り組まれている。また、大人になり仕事でレッジョを離れるものは多いが、結婚するとレッジョ・エミリアで子育てしたいために戻ってくる人が多いことが言われている。

(6) 保育環境

レッジョ・エミリアの園では、建物自体にみんながつながれる「広場」（ピアッツァ）が中心にあるのが特徴である。「広場」の中にも様々な環境が準備されている。表現のための素材は粘土や画材のほか、様々なリサイクル品（企業リサイクル）や自然物なども、園の環境の一部として用意されている。

「長期にわたるプロジェクト学習」はレッジョ・エミリアの代表的教育法の1つである。プロジェクトタツィオーネ（プロジェクト・アプローチ）と呼ばれる子どもの活動は、小グループのプロジェクト学習として展開される。

(7) アンケートのまとめ

参加者は、オンラインでの参加100名、50名の参加者及び20名の関係者で構成された。アンケート結果の詳しい分析は、今後に俟つことになるが、直接参加者の回答結果から示唆できる幼大連携の取り組みとは、子どもについての直接的な研究と共に、いかに保育者と子育て中の家庭に自分の保育や自分の育児と向き合う機会を作ることが大切なのかもわかってきた。海外の実践を見ながら、自分たちだけの保育、自分の育児にのみ目を向ける価値観を変える試みを視野に入れることも幼大連携についての課題にしたい。

引用・参考文献

(1) レッジョ・チルドレン【著】/田辺 敬子/辻 昌宏/木下 龍太郎【訳】(2001)「子どもたちの100の言葉—イタリア/レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録」学研プラス p.3

森真理 (2013)「レッジョ・エミリアのおくりもの」フレーベル館

「図画工作科授業における導入の在り方」(2年次)

| | | |
|-------|--------|-------------------|
| 研究代表者 | 西尾 正寛 | (畿央大学教育学部教授) |
| 研究分担者 | 岡本 卓也 | (客員研究員 御所市立掖上小学校) |
| | 金石 考弘 | (客員研究員 香芝市立下田小学校) |
| | 永井 麻希子 | (客員研究員 橿原市立鴨公小学校) |
| | 松井 泰子 | (客員研究員 桜井市立大福小学校) |

1 本研究のねらい

図画工作科の授業において導入は学級の児童全員に同じ指導を集中できる場であり、この教科の特徴と言える。本研修は“造形的な見方・考え方”を働かせる導入の在り方から図画工作科の授業改善を試み、教師の指導の仮説生成と実践化及びその検証を重ね、導入モデルを構築し提案することを目指す。

2 図画工作が育成する資質・能力と“造形的な見方・考え方”

(1) 育成する資質・能力

図画工作科が育成する資質・能力は以下の三観点、六項目で示すことができる。(i)

○知識及び技能

- ・児童が、造形活動において働く自分の感覚や行為を通して理解したり更新されたりする造形的な視点である知識。
- ・自分の思いを基に活動を工夫し、自分らしくつくったり表したりするための技能。

○思考力、判断力、表現力等

- ・「A表現」の学習を通して育成する、表したいことや造形的な活動を思い付いたり表したいことを見付けたりする発想やどのように活動したり表したりするかを考える構想。
- ・「B鑑賞」の学習を通して育成する、作品などに対する自分なりの見方や感じ方を広げたり深めたりする鑑賞。
- ・「A表現」「B鑑賞」双方に重なる、イメージをもつことに関する思考力、判断力、表現力等。

○学びに向かう力、人間性等

- ・図画工作科の学習を通して、よりよく生きようとする児童の情意が調和的に発達している姿。

(2) 造形的な見方・考え方

「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」(ii) であると考えられ、“資質・能力”と相互に支え合い「造形的な見方・考え方」を働かせることによって「資質・能力」が更に育まれたり新たな「資質・能力」が育まれたりし、それによって更に「造形的な見方・考え方」豊かになるなどの関係性をもつ。(iii)

2 導入部から授業を改善するために

第1年次の令和元年度の研究では、日常の授業実践から導入までに実施できる事項を抽出し、授業の始ま

りまでに行えることと、導入時で行えることに整理し、それらを基に実践検証を試みた。(iv)

(1) 導入までの授業の構成要素

「児童の活動の想定」「学習環境の工夫」「題材の選択」

(2) 導入部で行えること

「提案の工夫」「自己と対話し十分に思考する時間の保障」「他者と対話する言語活動の設定」「発想を共有できる板書の構成」「視覚資料の活用」「学習に必要な知識の提供と習熟の場面の設定」

3 本研究の課題

令和元年度の取り組みでは、児童の状況に応じた指導の工夫を試みる二つの実践検証授業を行った。

第6学年の「12年後のわたし」では、提案の言葉の吟味、児童と児童、教師による対話の場の設定、ワークシートの活用、思考の十分な時間の保障等を試みた。第3学年の「光とかげから生まれた形」では、光源の光に色を付けたり組み合わせさせて影の形をつくったりできる多様な材料の準備、思い思いに材料を扱い試せる場の設定と造形的な活動を思い付くための時間の保障等を試みた。

どちらも教科書題材で実践があり、実践者である客員研究員のていねいな指導により、学級の児童の多くは学習への主体的な態度に基づく資質・能力を働かせ、題材の目標を実現するに至った。一方で普段から学習に主体的になりにくいことが懸念されていた児童には指導が十分に働かず学級全体で時間をかけるだけでは十分ではなく、児童の個性に応じることができる導入を開発する必要性が明らかになった。

4 本研究2年次の導入仮説

本研究2年次では、小学校学習指導要領の平成29年改訂のポイントの一つである『『主体的、対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進』の考え方を積極的に取り入れるため、その定義と従来の導入の工夫の方策を整理する。

(1) 「主体的、対話的で深い学び」

①主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み自己の学習活動を振り返って次につなげる学びである。(v) 図画工作科では、自分が選んだ表現や鑑賞の活動であること、自分の進め方で活動できること、“考えていたこと”ができるようになることなどが実現することと考えられる。

②対話的な学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学びである。(vi) 図画工作科では、活動の自分の目的を考え意欲をもてるよう検討する自己内対話、造形活動で働かせる資質・能力を具体化する他者（友人や教師）との対話、材料を扱い試しに表現しながら見通しをもったり形や色で捉えたりする作品との対話が考えられる。

③深い学び

児童の習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考

えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。(vii) 図画工作科では「造形の見方・考え方」が働くように、児童が発想のきっかけとなる材料や場所、主題や用途などについて自ら造形的な視点で捉えたり、それらについて教師から形や色などについて意図的に働きかけられたりして、児童が協働しながら資質・能力を働かせることである。

(2) 図画工作の導入の指導

①授業を始めるまでに行う主な配慮事項

学級の児童や実施する題材のタイプを理解し、3つの授業改善の視点で捉え直す。

①-1 児童がもつ関心のタイプ

学習に主体的になりにくい児童には「好きなことには惹かれるが、そうでないと関心をもてない」「教師が活動目標を明確に示さないと取り組みにくい」などのタイプが考えられる。

①-2 児童の思考や活動のタイプ

比較的早めに目的を決め実現のために活動する児童の活動は教師にとって捉えやすいが、活動自体を楽しんだり友人との交流を通して目的を見付けたりする児童の活動は捉えにくい傾向がある。

①-3 題材のタイプ

題材には、個々の目的を決めてから活動することに適したものと、表現活動する過程で目的が決まる活動することが適した題材がある。

②授業の導入の場面で行う指導

②-1 提案の工夫

働かせる資質・能力を児童自身が捉え、成長の見通しをもちやすくするよう「提案の言葉」「材料や場所、新しい技法などとの出会い」「視覚資料の活用」を厳選する。

②-2 言語活動の設定

「対話的な学び」の3つの対話を関連的に設定する。友人や教師との対話のように具体的な活動として設定できるものと自己内対話や作品との対話のように起きることを想定し設定するものがある。具体的に言葉が発せられることがない対話では、教師は児童の表情や体全体の動きを通して児童の思考を捉え、必要に応じて造形的な視点にかかわる言葉がけを意図的に行うことが考えられる。

②-3 視覚資料としての板書の活用と作品掲示。

児童の活動の目的やその根拠となる思い、手掛かりとする掲示作品などを、黒板全体を使い配置・構成する。以下のような意図が考えられる。

・造形的な視点で捉えた活動の方法や進め方、表現の広がりなどで板書を構造化し、児童の発言や活動を位置付ける。

・発想や構想のつながりにできる活動の方向性や広がり方の違う参考作品、写真や図鑑などの視覚資料を必要に応じて提示する。

(3) 児童を主体とした大まかな学習の流れを考える。

○発想や構想する→技能を働かせて表す(→鑑賞する)

○鑑賞する→発想や構想する→技能を働かせて表す(→鑑賞する)

○技能を働かせる(材料や表現方法に慣れる)→発想や構想する→技能を働かせて表す(→鑑賞する)

以上が2年次を控えた導入仮説である。客員研究員が実践を行う学級の児童の実態、題材等を考慮し、3つの授業改善の方策を導入の指導に反映し実践を通してその妥当性を検証していきたい。

5 本研究2年次の実際

2020年初頭から顕在化した新型コロナウイルス感染症の拡大により2年次の仮説の検討をする間もなく一時中断となった。ここに述べてきた2年次の導入仮説は、10月以降のオンライン会議を通じた協議により具体化してきたものである。

以下では4名の客員研究員の所属校での感染対策下での図画工作科学習授業の実態、感染対策の一環として前倒して整備が進められているGIGAスクール環境によりどのような題材や授業の可能性があるかの報告を行う。

(1) 2020年度の実施題材の傾向

5月14日の緊急事態宣言解除後、感染対策をしながら徐々に授業を進めることになった。客員研究員の各学校でも図画工作科の授業で実施可能な題材を選び、実施することになった。実施した題材とどの概要は本誌末尾に資料として掲載するので必要に応じて参考にしていただきたい。

傾向については感染症対策下の授業の課題として後に挙げるが、授業が進むにつれて、学校の教室環境で感染対策をどの程度行えば十分と言えるのかの調整が進み、野外で距離を取って行うなど、行える題材の幅が広がっていたようにも受け取れる。

(2) 感染症対策下の授業の実際

①題材名 「ご案内いたします！」6学年

A表現(1)イ、A表現(2)イ、B鑑賞(ア)、[共通事項]A表現(1)ア、イ

○本題材の目標

形や色などの造形的な特徴を捉え、自分のイメージをもち、感じたこと、想像したことから、行き先を伝える案内板に表したいことを見付け、前学年までの材料や用具などについての経験や技能、表現に適した方法などを組み合わせるなどして表したいことに合わせて工夫して表し、自分たちの作品や身近な環境の造形的な面白さや楽しさについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める活動に主体的に取り組む。

○実施にあたっての配慮

題材の導入部では、児童が表したいことを思い付けるよう簡単なアイデアスケッチで自分のイメージを広げるようにした。構想する段階では、伝えたいことを理解し形や色を工夫できるよう看板を置く場所に行ったり写真に記録したりして見直しをもてるようにした。

表現の場では、思いに合わせて工夫できるように、十分な量の材料を用意し選べるようにした。看板の効果を確かめるため、どんなデザインのプレートをどの場所に置けば案内板として効果的であるか考えることができるよう、その場を歩いて確認するよう提案した。互いの行為が見合えるように材料・用具の置き場を教室の中央にし、座席の位置は間隔を開けた円形にした。

○活動の実際

図-1の作品は、1年生教室への案内板である。この児童が1年生の友人に対してもっている、学校へ行くことがわくわくするというイメージを、顔出しパネルにしたり、来校者に対して楽しさが伝わる

ように形や色を工夫したりしていた。この姿からは、目標の「形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもち、感じたこと、想像したことから、方向や場所を伝える案内板に表したいことを見つけて工夫して表す」ことが評価できた。



図-1



図-2

図-2は、理科室への案内板である。この児童は、理科室といえば人体模型だと考え、骨格模型が実際に話して案内をしているかのように表したら見た人も面白く感じるのではないかと考えたそうである。また、目を矢印の形にして看板としての用途を実現している。この姿から、発想や構想したことを表し方を工夫して表していることが評価できた。

一方、左に行けば3年生教室を案内するという表現を見ると、3年生教室を案内する文字が非常に小さく、看板としての役割を十分に果たせていない。この題材の「方向や場所を伝える」という用途については十分に実現されていないと判断した。活動中にも目標で示している内容をていねいに確認する必要がある。

(岡本卓也)

②題材名「風をとらえて」

A表現(1)ア、A表現(2)ア、B鑑賞(ア)、〔共通事項〕A表現(1)ア、イ

○目標

形や色などの造形的な特徴を捉え、自分のイメージをもち、風を受ける材料や風が吹く場所などの特徴を基に、造形的な活動を思い付き、構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながら前年までの材料や用具についての経験や技能、方法などを組み合わせたりするなど活動を工夫してつくり、自分たちの作品の造形的なよさや美しさについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める活動に主体的に取り組む。

○実施にあたっての配慮

校舎の周りや校庭など屋外で、よく風が吹いている場所を探し活動場所として検討した。感染対策をとしてグループではなく個人で活動することを前提とし、必要に応じて距離を取りながら友人と協力することを促した。風を表すことができるような材料(布、スズランテープ、風船、網、養生シートなど)を多く用意することで、活動が充実するようになった。また、材料や用具は図工室の何箇所かの場所に分散して分けて用意することで児童が集まらないようにした。(図-3、図-4)

○活動の実際

導入時、旗がなびいている写真と旗がたれている写真を見比べて、教師の「風を材料で見えるようにするには、どんなものを使ったらいいかな」との問いかけに、児童が互いに相談して風の動きを生かすためにど

のように活動するかを構想し、思い付いた材料を持参するよう打ち合わせる話し合いも見られ、活動に主体的に取り組もうとする姿が見られた。



図-3



図-4

表現の活動の場では、風と場所の特徴を考え、材料から思いついた方法を友人と相談しながら、活発に意見を交わしながら風を表す活動が見られた。個人で活動していたが、自然と友人と協力し、風を表す方法について試行錯誤する姿から、発想や構想する姿を捉えることができた。風船だけで表現しようとしていた児童から「スズランテープをもってきたけど、なにかに使えないかな」という提案が起こり、風船とスズランテープを組み合わせる技能が現れるようになった。(図-5、図-6)



図-5



図-6

風が吹いた瞬間に自分の体でも表現する児童が現れ、そこから自然と集まった子供たちが真似をして風を表す姿も見られた。

課題としては、風の表し方に深まりが表れなかったことが挙げられた。主体的ではあったものの対話できる学習環境ではなく互いのよさや違いを交流し意識できなかったことが考えられる。個人で活動に取り組むことにしたことで、互いの活動の距離が開き過ぎたことが原因だろうか。導入時、場所について学級で話し合った際に、活動する場所を余り間隔が開きすぎないないように限定し、ある程度の人数で活動しやすいようにした方がより児童の対話的な学びが発揮されたように考えた。

③題材名「こんなところにいるのかな!？」(5年)

A表現 (1) ア、A表現 (2) ア、B鑑賞 (ア)、〔共通事項〕 A表現 (1) ア、イ

○目標

形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもち、感じたこと、想像したことから、表したい場面や人がいる感じのポーズなどを見付け、表したいことを基に表し方を工夫して表し、自分たちの作品や身近な環境の造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて感じ取ったり考えたりし自分の見方

や感じ方を深める活動に主体的に取り組む。

○実施にあたっての配慮

班に1台のタブレットを用意し校舎内のいろいろな場所を撮影し、どの場所で活動すると見えないけれどこんなところに人がいると面白そうと思う活動ができそうか交流した。班で一つの材料や機器を扱うので、活動前と後の手洗いの徹底をするよう指示をした。

表現の場面では、そこに人がいるような表現をするために、実際にポーズをとって撮影し、手や足の細かな様子確かめるよう提案した。一つのポーズをいろんな角度から見るができるように班のメンバーで様々な角度から見るようにすることは、メンバーの距離を確保する点でも感染対策になると考えた。

○活動の実際



図-7



図-8

図-7の班は、誰もいなくなった放課後の図書室で、人が本を読んでいるという設定で活動していた。材料で実際に本を読んでいるように見せるためには、その姿を実演し、それを撮影しながら、どのような指の形や角度をしているかなどを考えていた。(図-8)これは、目標の表したいことを基に、表し方を工夫しているという技能が働いた姿と判断できた。

図-9の班は、どの角度から撮影すると人が掃除をしている気配を感じるかということを通して考え、いろいろな角度からアップやルーズで撮影をして作品の面白さを感じ取ったり考えたりしていた。これは、目標の思考・判断・表現の能力が働いていると伺えた。



図-9



図-10

図-10の班は、マットの上を何人かの人が歩いているという設定で活動していた。靴を様々な向きに置いて意図を表そうとしていたが、撮影すると靴が散乱しているだけのようにも見え、靴の置き方を検討する様

子が見えたが結果的には追求しきれずに別の活動に移っていた。多様な活動を思い付き取り組むことは、主体的に活動している姿と捉えられるが、迷いを生じている活動について、指導者はどのように支援をすればよかったのか、課題が残った。

④題材名「水の流れるように」(6年)

○目標

形や色などの造形的な特徴を捉え、自分のイメージをもち、水が流れる様子に感じたことや想像したことから表したいことを見付け、形や色などを考えながらどのように表すかについて考えたり、ガラスが溶けてできる水の感じを想像しながら、表したいことに合わせて高低差や傾きやガラス片の敷き方などを工夫して表したりし、自分たちの作品造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて感じ取ったり考えたりし自分の見方や感じ方を深める活動に主体的に取り組む。

○実施にあたって配慮したこと。

表したいことを見付けられるように、水が流れたり溜まったりしているように見える形や表す方法を考える時間を十分にとった。

児童は、ガラスを焼いて溶かすことでできる表現が初めてなので、イメージをもてるよう教科書作品を見ながらガラス片を置いてみる活動を設定し、色の違うガラス片の組合せや置き方を試しながらどのような表現ができるかについて対話する場をもち見通しをもてるようにした。

ガラスを置く際には軍手を着用し、一人一つのスプーンを使うことで、ガラス片を安全に扱うことと感染症への対策を行った。(図-11、図-12)



図-11



図-12

○活動の実際

図-13の児童は、噴水から水が下に流れているように表したいと考えた。そこから水を下へどのように流せばいいか、穴をあけ、いろいろな角度から作品を見ながら、表したいことについて班の友人と対話し、次第に表したいことや表す方法をはっきりとさせていく姿が見られた。これは、発想や構想する姿が伺えた。



図-13



図-14

図-14の児童は、コップに水が溜まっているように表したいと、水道の蛇口とコップを組み合わせた形をつくっていた。ガラス片が溶けると水が深く溜まっているように見えるようコップの底に青色のガラス、その上に薄い水色を色の違うガラス片の敷き方を工夫していた。目標の、ガラスが溶けてできる水の感じを想像しながら、表したいことに合わせて高低差や傾きやガラス片の敷き方などを工夫して表したりする技能が働いた姿だと判断できた。

表したい事を表せるよう、かきべらなど粘土を形づくる用具を準備した。穴を深く掘ったり余分な粘土を削ったりする児童がいたが、ほとんど使わなかった。積極的に用具を紹介し自由に試す時間を設けることで用具を使った表現の幅が広がり、その経験が知識になると考えた。

(3) 感染症対策下の授業の課題

- ・教室あるいは校舎内で友人と協力して「造形遊びをする」題材は実施が難しい。中学年や高学年にある光を使った造形あそびの活動では暗室をつくるのに密室になる。十分な感染症対策が施せず、互いに気を遣い合うことを強いた結果、児童の活動が不十分に終わることが予想される。
- ・低学年の新聞で包むことをてがかりにする「造形遊びをする」活動のように児童が必然的に密になる題材も難しい。一人で活動するよう指示していても、活動中に自然に近付いたり、寄り添ったり、狭い場所に集まってしまうことが考えられる。
- ・向かい合って対話したり、膝を突き合わせたりしながら取り組む活動。対話の場面では感染対策が難しいが対話を避けて学習することも難しい。
- ・木工用の用具や版画用具、接着剤、電動の器具など一つの材料や用具を共用する活動。対策では一人が一度使うたびに消毒するになっているが実際の授業では現実的ではない。無理をしてでも一人に1セット用意し、手洗いをして使用し、授業終了時に消毒することで対応する方法が考えられるが実行には至っていない。電動糸鋸盤は、活動前の消毒と活動中のマスクと手洗いの徹底で使用した。

(4) GIGA スクール環境の実現に向けて期待できる授業像。

○児童ができること

- ・描画アプリを活用したアイデアスケッチ。場所から発想する活動では選んだ場所の画像へのレタッチ機能を活用する。
- ・造形表現に音を組み合わせた総合表現。
- ・校舎内や校庭に出かけ互いに離れて活動する題材で、個々にパソコン（タブレット）を持って活動する場所を見つけて活動する。表現している過程の作品やその時に困ったことなどをG Suite for Education + Classroomで共有する。
- ・友人の活動や作品を近くにいて見なくても、画像共有すれば、自由に、また細部まで自分ができる時に鑑賞でき、密になることを避けながら児童が意見を交換できる。
- ・造形遊びをする活動のような作品として残らない活動の画像としての記録。
- ・板書、発想のてがかりのメモ、自分の製作の過程と完成した作品の画像、学習で得た知識・技能等を保存し必要な時に振り返ることができるポートフォリオを作成する。

○教師ができること

- ・作品として残らない活動の画像を記録し評価資料とする。

- ・学校での休憩時間や休日の自由な時間に見つけた風景や思いついた表し方を写真で記録し、題材選択や改善に生かす。
- ・個人情報の問題をクリアした上で各家庭と図画工作で児童の学習の様子を共有する。
- ・ネットワークを利用した鑑賞により、同じ題材に取り組む他校の児童との交流を組織する。

5 今後の研究計画

1年次の段階では仮説に基づいた実践と記録したビデオのリフレクションによる考察を行い、実施した工夫の働きにより導入の工夫の構成要素の分類と整理を試みる計画であったが、現状では研究者が集まって協議できる見通しは立っていない。今後、奈良県下の各学校で展開するネットワーク活用の状況に応じて、動画サイトを利用した情報共有とオンライン会議による協議の実施等の感染対策下における共同研究の方法を模索・具体化し、本プロジェクトの研究を遂行できるように努力したい。

参考文献

- (i) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』. 日本文教出版. 第2章1節 .pp12-15.2018
- (ii) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』. 日本文教出版. 第2章1節 .p11.2018
- (iii) 岡田京子『図画工作科における「見方・感じ方」を働かせて資質・能力を育成する授業』. 東洋館出版 “初等教育資料 2019年9月号 特集I 資質能力の育成-「見方・考え方」を働かせることを通して-” . p31.2019
- (iv) 西尾正寛他3名『図画工作科授業における導入の在り方』. 畿央大学現代教育研究所 2019年度活動報告書 .pp7-12
- (v) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』. 東洋館出版社. 第3章3節 .p77.2018
- (vi) 同上
- (vii) 同上

「箏の指導のための教師教育プロジェクト」

研究代表者 衛藤 晶子 (畿央大学教育学教授)

1 本研究のねらい

本研究の目的は箏の指導ができる教師を育成することを課題とし、和楽器を学校教育に広めるための教師教育プログラムを開発することである。

本研究では、子どもが箏と相互作用することで音楽をつくりだしていくという立場をとるため、先行研究である『義務教育9年間の和楽器合奏プログラム 生成の原理の立場から』¹⁾をテキストとする。本書にあるような授業ができる教師育成をめざし、箏の指導のための教師教育プログラムを開発する。

2 今年度の活動内容

今年度は、奈良県内の小学校2校から貸し出し希望があった。1校は、特別支援学級での初めての実践であったため、ワークショップを事前に行った。もう1校は昨年度実践された小学校から再度申込みがあり、初めて箏を触る2・4・6年生と昨年音楽づくりを経験した5年生で実践された。本稿では特別支援学級対象の実践を中心に報告する。

(1) プログラム案の作成

昨年度のプログラム案を基に、1時間のワークショップのためのプログラム案を作成した。【 】はテキストのプログラム番号である。

| プログラム | 指導内容 | 箏 | 受講生 |
|--|-----------------|-----------------|---|
| 【I-1-2】 いろいろな音色 | 音色の知覚・感受とその関係づけ | 箏柱五六七(ミソラ) 爪無し | 音探究・音楽づくり |
| 【I-3】 2音のわらべうた(高低) | 高低の知覚・感受 | 箏柱 13本または七六(ソラ) | 《だるまさんがころんだ》必要な柱を自分で立てて弾く |
| 2音のわらべうた(高低) 創作 | 旋律 | 箏柱 13本または七六(ソラ) | 《あしたてんきになーれ》または《いちばんほしみつけた》替え歌づくり |
| 【I-4】 2音のわらべうた(問答) | 呼びかけと答えの知覚・感受 | 箏柱 六七(ソラ) | 《あそび、いいよ》の続きをペアでつくる |
| 【II-1】 爪をつけて2つの音で基本奏(しっかり弾き、ひっかけ弾き) | 音色の知覚・感受 | 爪配布 | 《だるまさんがころんだ》をしっかり弾きで演奏する |
| 【II-2】 3音のわらべうた(テクスチュア) | | 箏柱 六七八(ソラシ) | 《なべなべそこぬけ》⇒ここで伴奏をつけてもよい(二・二・二・二) 八の柱を立てる |
| 調弦 | | 13本の柱をたて調弦 | ペアで音を確かめながら調弦する |
| 【II-3のアレンジ】 ピッチカート伴奏をつける(テクスチュア) オスティナートの重なり | テクスチュアの知覚・感受 | | 《なべなべそこぬけ》にピッチカート伴奏をつける オスティナートをつける |
| 【III-1】 平調子で《さくらさくら》を弾こう(平調子とカラリン) | 民謡音階と都節音階 | | 民謡音階のまま《さくらさくら》を弾けるように音探しをして、都節音階になるよう柱を動かす |
| 【III-3】 《さくらさくら》に副次的旋律を重ねる(音の重なり) | 合いの手 | | ペアになって《さくらさくら》に副次的旋律を入れる。合いの手とユニゾン |

(2) プログラム案の実施

小学校特別支援学級の教員6名を対象に行った。1名は経験者、5名は箏未経験者である。2人で一面の箏を使用した。「【Ⅰ-4】2音のわらべうた（問答）」では、「あそぼ」「いいよ」の続きを二人組で考え、箏を弾きながら歌った。「何してあそぼ」「おにごっこ」「疲れるからいやだ」というように2音で演奏しながら自分たちの思いを即興で歌う姿が見られた。「【Ⅲ-1】平調子で《さくらさくら》を弾こう」では、耳で音を確認めながら2人で協力して箏柱を動かして都節音階に調弦をした。知っている楽曲を頼りに調弦するため、自然と歌を口ずさみながら調弦を行い、隣のグループに音を確認してもらおうといった姿も見られた。「【Ⅲ-3】《さくらさくら》に副次的旋律をつける」では時間が過ぎるのも構わず2人組で納得するまで何度も演奏していた。いずれの活動もペアやグループ同士で教え合いながら進められた。

(3) 実践授業の様子

1～6年生の13名を対象に、①きいてみよう②さわってみよう③音さがしの流れで授業が行われた。

① きいてみよう

4名の先生方で《さくらさくら》のアンサンブル演奏を披露した。まず、1人が主旋律を歌いながら演奏し、その後ピッチカート伴奏、合いの手、ユニゾンというように音の重なりを順次加えていった。「一人で弾いたときと四人で弾いたときとで比べてどうでしたか」という発問に児童からは「いきなり現代から江戸時代になった」という音の重なりが醸し出す雰囲気を感じ取った発言がなされた。

② さわってみよう

13本の箏柱をたてた箏に2人一面で取り組んだ。爪をつけずに一から巾までの弦を両手でかき鳴らす、1本1本つまんではじくなど色々な音色を試した後、爪をつけてさらに音色探究を行った。トレモロのように細かく音をならす、弦を爪の横でこすってかすれた音を出す、爪の裏側ですくって音を出すなど、様々な奏法を見つけ、最後は一人一人が自信をもって発表していた。

③ 音さがし

六七の音を使って《だるまさんがころんだ》の音さがしを行った。六七以外の箏柱がたっていたため、六七の音だけで見つけるのが難しかったが、「ララララララソ」や「ラソソラソラソラ」というように自分が思った《だるまさんがころんだ》を演奏する姿が見られた。

3 今年度の成果と課題

・箏に慣れていなくてもワークショップで行ったプログラム案の中から児童に実態に応じて、プログラムの内容を組み替えて授業を構成することが可能であることが検証された。

・昨年度、本学のワークショップでアシスタントをした方が勤務先で和楽器合奏組み込んだ教員免許講習を実施された。プログラム案を参考に、五六七の箏柱をたてた音色探究から《さくらさくら》の演奏まで行った。ワークショップのアシスタント経験があれば、プログラムを参考に講習会を開催することの可能性が見いだせた。

・柱をたてる、しっかり弾きで演奏するなど技能の習得にはある程度の時間が必要なため、ワークショップをシリーズ化するなど、複数回にわけて実施することが今後の検討課題である。

「社会科における地図活用を視点とした防災教育の系統性に関する研究」

研究代表者 小谷 恵津子（畿央大学教育学部准教授）

1 研究の目的と昨年度の成果

本研究の目的は、小・中学校社会科における防災教育について、地図の活用を視点としてその系統性を明らかにすることである。昨年度は、系統性を考える上で必要な視点として、「地域のスケール」と「文部科学省が示す防災教育の目標との関連」の2つを設定し、検討を行った。前者の視点からは、学習指導要領で各学年に位置付けられている防災や安全に関わる学習内容で取り扱う地域の配列が、スケールの観点から見ると複雑なものとなっているため、National や Global レベルでの学習においても Local レベルの社会事象を取り上げる必要性を指摘した。後者の視点からは、小学校では自助や共助の重要性への理解が、また、中学校ではより共助に力点を置いた資質・能力の育成が必要となることを指摘した。

2 来年度以降に向けての展望

防災教育を通して育成された資質・能力を、子どもが自助や共助の主体として実生活の中で働かせていくためには、「自分ごと」と感じられるように防災教育を展開することが欠かせない。しかし、「自分ごと」として捉えることが十分でないままに防災教育が行われていることが少なくない現状が、調査により明らかになっている¹⁾。また、過去に自然災害に見舞われた地域であっても、時間の経過と共にその経験をもたない子どもたちが学び手となることから、防災を「自分ごと」として捉えることは年々難しくなっていく。

一方、公民としての資質・能力の育成を目的とする教科である社会科でも、学習を通して育成された資質・能力を実生活の中で働かせられるように学ぶことが求められる。そのため、社会科教育では「社会参加」や「社会参画」が重要な概念として位置付けられており、特に社会問題を取り扱う学習においては、子どもがその問題を「自分ごと」として学ぶことが大切になる。「社会参加」や「社会参画」につながる資質・能力の育成を目指す様々な授業構成論について、中本和彦は、学習においては直接的に社会参加を求めるほど、内容的にも方法的にも、社会問題を引き起こしている社会の分析が弱まることを指摘する²⁾。このことは、公民としての資質・能力の基盤となる社会認識の形成において、課題が生じることを意味する。

本研究で防災教育の系統性を考察する手掛かりとして位置付けている地図は、その活用により、社会認識形成にあたって有用な情報を提供するとともに、地表の様子を多様なスケールで表現できる媒体である。来年度以降は、社会科防災教育の系統性という視点からも、また、子どもが「自分ごと」と捉えられる学習を展開するための手立てという視点からも、地図活用のあり方について検討していきたい。

【引用参考文献】

- 1) 吉川武憲・村田守「防災に対する理科教育の役割—防災に対する関心が低い地域の中学生的実態から—」, 学校防災研究プロジェクトチーム『生きる力を育む学校防災Ⅲ』, 協同出版, 2015, pp.215-225
- 2) 中本和彦「社会参加としての社会科授業構成論」, 社会参加研究会『社会参加を視点にした中学校社会科の教材と評価に関する研究』, 日本教材文化研究財団, 2016, p.27

公募研究5

「ダイバーシティ教育を視野に入れた外国籍児童に関わる教育の基礎的研究」

| | | |
|-------|------------|----------------------|
| 研究代表者 | 竹下 幸男 | (畿央大学教育学部教授) |
| 研究分担者 | 生野 勝彦 | (畿央大学教育学部講師) |
| | 福森 貢 | (畿央大学健康科学部教授) |
| | Randy Muth | (畿央大学教育学部准教授) |
| | 石川 裕之 | (客員研究員 京都ノートルダム女子大学) |
| | 出井 義雄 | (客員研究員 生駒市立上中学校) |
| | 深田 将揮 | (客員研究員 神戸学院大学) |

1 本研究のねらい

日本の公立学校に在籍する外国籍児童生徒が①どのような指導・支援体制において成長・発達し自己実現していくのか、②いかなる言語や文化的障壁が存在するのか、③ダイバーシティ教育の観点がどのような様相にあるのか、明らかにし、外国籍児童生徒の教育の在り方を提言していくことが本プロジェクトの目的である。これはそのような状況におかれた児童生徒のみならず、対応に苦慮する学校や自治体、ひいては日本の公教育にとっても有益な調査になると考えられ、また本学における教員養成課程の教育にも寄与するのではないかと考えられる。

本年度は、本プロジェクトの2年目であるが、以下に前年度行った現地調査の報告をまとめた。年度末に訪問調査を行なったので、前年度の報告書締め切りに間に合わなかったためである。なお、いずれも WHO によるパンデミック宣言以前の訪問である。(文責：竹下)

2 訪問調査報告

(1) 鹿児島県

日時：2020年1月16日(木)13時～16時

場所：鹿児島市教育委員会及び鹿児島市立名山小学校

訪問者：生野勝彦、深田将揮

情報交換の概要：鹿児島市教育委員会学校教育課主任指導主事の森拓郎先生から鹿児島市の外国人及びその子どもについての説明を受けた。令和元年5月1日現在、鹿児島市の人口は603,203人であり、そのうち3,129人(0.52%)が外国人である。小学生33,332人のうち53人(0.16%)、中学生15,573人のうち15人(0.10%)が義務教育学校に通っている。国籍別外国人登録者数は平成25年3月末では中国919人(45.7%)、朝鮮韓国230人(11.4%)、フィリピン180人(9.0%)、アメリカ117人(5.8%)である。外国籍の人たちがいる理由については様々な理由があり、特に大きな割合を占める理由があるわけではない(労働・留学・日本人との結婚)とのことであった。また、いつごろから外国籍の人たちが増加したかについては、平成27年度までは2,000人前後から2,100人程度で推移していたが、28年度から増加数が倍になった。しかし、外国人児童生徒は平成12年度が95人と最も多く、その後は減少傾向にあり、平成19年度以降は40～60人程度で推移している。日本語について援助が必要な児童生徒数は22人であり、母語別人数はタガログ語5人

(22.7%)、英語5人(22.7%)、中国語4人(18.2%)と各自異なる背景をもっている。実際にどのように日本語の援助を行っているのかについては、通訳、日本語教室の運営である。日本語教室の運営については、鹿児島市立名山小学校(以下、名山小学校)が中心となり校内の児童だけでなく、中学校に進学後も名山小学校の日本語教室に通っている生徒がいる。また、鹿児島市教育委員会は名山小学校に協力者を2名委嘱し、通級で通えない校区等の児童生徒については訪問指導を行っている。外国籍児童生徒への援助の研修については、年2回名山小学校の教員からの情報等を利用して実施している。日本語について援助が必要な保護者については各在籍校で対応しているが、その内容は保護者間の人間関係を利用したものや、英語でのやり取り、漢字にルビをふるなどである。外国籍の児童生徒の背景や文化を理解するための取り組みとしては、当該児童生徒の出身国の作家の文学作品の読み聞かせ、保護者の協力を得て母国の料理教室の実施、外国語活動や総合的な学習の時間に様々な言語、文化や暮らし等の調べ学習や体験活動などを行っている。外国籍児童が在籍していることによるメリットとしては異文化理解や共生についての関心が高まると考えており、逆にデメリットとしては、来日当初は日本の生活や日本語を理解できない状況で学校生活を送ることが難しい場面があり、教職員、特に担任が十分手厚く対応できないことである。

そこで、指導の実状を知るため、名山小学校を訪問し日本語教室担当の中峯先生、河野先生、篠原先生の授業を参観した。

その授業は、小学校3年生の男子フィリピン籍児童、女子中国籍児童2名を各先生が1名ずつ担当するマンツーマン授業であった。授業はそれぞれの子どもの性格に対応したもので、児童と教員との人間的なつながりを感じるものであった。以下は授業後、3名の先生から日頃の取り組み等について伺った内容である。

外国籍の児童と保護者なのですべて個別に対応しなければならない。保護者とのコミュニケーションが困難なこと。日本語がわからないので思いを伝えられないことがあるが、子ども同士のコミュニケーションを通して日本語が上達していく。中国語などに興味をもつきっかけとなっている。指導は自分自身の工夫で手探りである。子どもが学んだ言葉をつかうようにしている。日本語教室では言いたいことを言って、発散している。もっと教えた気持ちはあるが、週4時間では限界がある。中学校を卒業後、高校等への進学がなかなかできない。外国籍児童の取り組みについて他県との連絡会等はない。以上のように名山小学校の日本語教室を担当している3名の先生方は、児童保護者に対し個別に対応しており、特に保護者とのコミュニケーションにおいて困難さを感じているようであった。日頃の指導は経験を生かした工夫を中心に計画していた。中学へ進学後も日本語教室へ通うのは、児童と保護者、教員の人間関係が良好なものであるからに他ならない。また、日本語教室は言葉が通じない国に来て、不安をもった子どもが安心できる場所であり、日本語を学ぶと同時に心の安定を図る場所になっているようにも感じた。(文責：生野)

2 沖縄県

(1) 沖縄県 ① フェルナンド氏へのインタビュー調査

日時：2020年2月16日(日)13時～16時

場所：那覇市

訪問者：竹下幸男、深田将揮、Randy Muth

昨今、沖縄県の在留外国人は、顕著に伸びている。一般財団法人 南西地域産業活性化センター発行、沖

縄経済レビュー（No.11）の「県内の在留外国人の動向」によると、2018年末現在、1万8,025人（前年末比2187人増加）となり、増加率でみると全国で6番目の高い伸びであった。そのようないわゆる、ダイバーシティ環境が顕著な沖縄県で2020年2月16日、那覇市内でペルー出身の在日外国人フェルナンド氏を対象にインタビュー調査を行った。このインタビュー調査の目的は、沖縄県で生きる外国籍の人物を対象にその生活や考え、また、アイデンティティ形成をどのように行ってきたかを明らかにするために行った。また、フェルナンド氏は、琉球大学、沖縄国際大学及び嘉手納町立嘉手納外語塾で言語教師をしているため、言語教師としての教育的視点を聞き出す目的もあった。

フェルナンド氏は、ペルー出身の在日外国人で、在日歴30年、沖縄県那覇市在住である。彼の奥さんは、沖縄出身の日本人で、彼女の出身地でもあり、沖縄に住み始めたそうである。フェルナンド氏の母語は、スペイン語であるが、日本語、英語も使いこなすマルチリンガリストである。どの言語もほぼネイティブ並みに使いこなし、インタビューは日本語で行ったが、アクセント、イントネーション等、全く気になるものはなかった。また、彼には、15歳になる息子さんがおり、息子さんは、沖縄生まれ、沖縄育ちということもあり、フェルナンド氏いわく「完全な沖縄の子」だそうである。沖縄では、上述した各学校でスペイン語教師、英語教師として日々指導にあたっている。彼自身、沖縄での生活や風土が大変合っているようで、故郷であるペルーに帰郷することは考えていないとのことだった。その理由の大部分を占めているのが、琉球空手との出会いである。

フェルナンド氏は、長年、琉球空手をしており、現在では、有段者として指導にもあたっている。特に琉球空手を通して多くの方との出会い、交流をし、沖縄での生活基盤の大部分を占めている。将来は、この琉球空手を通して人々とより関わり、コミュニティ発展のために寄与したいと述べている。

フェルナンド氏は、琉球大学、琉球国際大学でスペイン語を、嘉手納町立嘉手納外語塾では、英語教師として言語の指導にあたっている。言語を通して若者の成長を見守り、支援することを生きがいと感じており、前述の琉球空手同様、人との関わりや支援を愛する彼の人柄がここでも見られた。

彼のアイデンティティ形成の大部分を占めるのは、やはり人との関わりである。スポーツや言語指導という媒介を通して、多くの人々と関わり、時間を費やすことで彼自身を形成し、また、沖縄という風土がさらにそれを固めているようである。つまり、沖縄に住む人々とのコミュニケーション、共有する時間や空間が故郷での生活以上の快適さを生み、彼自身を形作っているようである。インタビューでは、終始、沖縄の魅力や沖縄での生活のすばらしさを述べており、彼が心から沖縄や沖縄の人々を愛していることがよくわかった。

最後に嘉手納町立嘉手納外語塾に関しては、言語指導の面で興味深い取り組みや指導を聞くことができたため、何らかの形で追跡調査をしたいことを付記する。（文責：深田）

引用・参考文献

一般財団法人 南西地域産業活性化センター 沖縄経済レビュー（No.11）
<https://niac.or.jp/topix/keizaireview11.pdf> 最終閲覧日 2020年2月29日

(2) 沖縄県 ② アメラジアンスクール訪問調査

日時：2020年2月17日（月）8時45分～11時

場所：アメラジアンスクール（宜野湾市）

訪問者：竹下幸男、深田将揮、Randy Muth

沖縄県宜野湾市にあるアメラジアンスクール・イン・オキナワを3名で訪問し、事務局の担当者と面談、施設の見学と授業参観を行った。

アメラジアンという言葉は耳慣れないものかもしれないが、アメリカとアジアの合成語であり、アメリカ人とアジア人の間に生まれた人を意味している。この学校は、日本の学校教育法に則った組織ではなく、特定非営利活動法人のいわばフリースクールであるが、本稿では便宜上、学校と呼ぶことにする。この学校の設立趣旨は、以下である。

アメラジアンスクール・イン・オキナワは、アメラジアンの子どもたちに、安全かつ平等に学習する権利が保障された環境づくりに努め、互いに助け合い、自らの持つルーツに誇りを持つことができる事を目的とし、そのためアメリカとアジアの両言語・両文化を等しく尊重し、英語と日本語によるダブルの教育を行います。アメラジアンスクールは、小学校・中学校課程（義務教育課程）の子どもたちへ、高等教育への進学のために必要な教育を行います。http://amerasianschoolokinawa.org/about_me/about.html

アメリカとアジアという二つのバックグラウンドを持つ子供が、その両方のルーツに誇りを持って成長できるような教育の機会を与えることが重要な設立趣旨である。

在籍しているのは幼稚園の年中から中学3年生のアメラジアンの子供たちであるが、5%を上限にアメラジアンでない子どもも受け入れが許容されている。在籍する子供は、宜野湾市に限らず、遠方の他地域からも入学できる。そういった場合、小学校卒業までは保護者の送迎が必要となる。だが全体の在籍数が多くないので、そもそもそのような子供たちも多くはならない。教育内容は、日本の小学校カリキュラムとアメリカの基地内学校のカリキュラムに則っているが、修了して取得できるのは日本の卒業資格である。子どもは形式上、地元の公立学校にも在籍しており、単位認定は、その公立学校が行う。また日本の学校と同じような担任制を採用している。

この学校の大きな特色は、上記のような教育を、日本語と英語の両方で行っている点である。背景にあるのは、アメラジアンの中には、生活環境によって、いずれかの言語習得が十分でない場合があることだ。例えば、日本語が不十分な子供が日本の公立学校に在籍した場合、全て日本語で行われる授業を理解することに困難が生じることは容易に予想できるし、そのような事例も実際にある。そのような事態を少なくすることが、自らのルーツに誇りを持つ子供を育てる第一歩だといえよう。

一方で、一口にアメラジアンと言っても、子供により、日本語が強い、英語が強いなどの、親近性の強い言語とその程度が異なる。したがって、同じ内容を、日本語と英語の両方で教えることもある。また、そのような言語のアンバランスを補うために、日本語や英語の補習授業も行われている。

学校は、県の施設を借りて運営しているため、十分なスペースがない。例えば、図書館は専用の部屋を用意できず、廊下に本棚をおいて代用している。また、運動場もないため、近くの公園や、ビルの屋上などで運動を行う。学校法人であれば、このような運営の仕方はできない。運営にかかる費用については、県から

の補助金で2分の1、授業料で4分の1、寄付で4分の1を賄っている。

日本の学校のように、日直があり、掃除も子供がする。給食はケータリングだが、希望により持参することもできる。また食育も行っている。運動会もするが、日本の学校のようなことはない。遠足はあるが、日本学校のような行事というよりは、授業の中で校外学習をする感覚に近い。修学旅行も中学3年で行われ、訪問した頃が実施時期だったのだが、東京で感染が広がり始めており、子供が受験など大切な時期でもあり、希望しなかったのがキャンセルになった。

中学校卒業後の進路については、公立高校への進学率も高い。一方で、二言語教育と受験教育をいかに両立させるかが課題となっている。また、これまで卒業後の追跡調査をしてくれなかったため、卒業生が、どのようなキャリアを進んだのかあまりわからないのは残念なことである。

沖縄にある学校としての特色については、例えばエイサーなどの沖縄の文化を学ぶものもある。また基地の米兵やその家族がボランティアとして学校に来ることもある。

教室の雰囲気は担任の先生によって異なり、アメリカの学校のような教室もあれば、日本のような教室もある。日本の学校と違う点として興味深かったのは、お菓子を持ってきてよいということで、授業の合間の休憩時間に子供達がエネルギー補給をしている様子は微笑ましいものだった。学校にタブレットが寄付されたそうで、それらが全員に貸与されており、教育に生かされている。このような寄付やボランティアのあり方はアメリカの学校を彷彿とさせる。

先述したように在籍している子供たちの人数は多くはないものの、子供の個性に合わせたきめ細かな教育が行われている様子が窺えた。一方で、アメラジアンとしてのアイデンティティ形成については理解できるが、そのアイデンティティ形成が、日本社会やアメリカ社会で、どのように受け入れられるのか懸念もされた。(文責：竹下)

3 おわりに

改めて強調しておくが、これらの調査報告は全て、前年度に行ったものである。いわば、BC (Before Christ ならぬ Before Covid-19) の時代に現地を訪問し、直接人々に会って話を聞いた結果である。したがって、この報告に登場する人々はほとんどマスクなどつけてもいない。パンデミックが生じていなければ、この報告を書いている時点で、今年度の調査の準備をしていたところだろうが、現時点では、調査再開の日処は立っていない。来年度においては、状況を考慮に入れながら、本プロジェクト研究の進め方について再考する必要があるかもしれない。(文責：竹下)



名山小学校の日本語教室 (鹿児島県)



マンツーマンの日本語指導の様子 (名山小学校)

II 「学びを結ぶ」オンラインセミナー 報告

畿央大学現代教育研究所では設立の主旨である、学校現場における教育力向上の一助になる活動の一環として、2013年から研究所研究員による解説と実践を交えたワークショップを学校園の夏季休暇中に実施してきました。しかし今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、春の時点で大学における従来の対面形式のワークショップの延期を決定、学校園の再開後の状況を鑑み、オンラインセミナー形式での開催としました。

「小学校学習指導要領改訂のポイントを踏まえた指導と評価の実際」をテーマに、国語科と体育科の講座を実施し、二学期末の忙しい時期にも関わらず10余名の参加をいただきました。ここでは、本書をお読み頂く方にご活用頂けるよう各講座の概要と講座で使用しましたスライドの資料を紹介いたします。

1 実施日時

令和2年12月5日（土） 13時00分～14時45分

2 開催形式

Z o o mを利用したオンラインセミナー

3 セミナー案内文

第1部「国語科の学習課題について考える」

講師：八木 義仁（教育学部准教授）

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。国語科において、主体的な学習を支えるのは、学習課題です。しかし、現状では「～しよう」「～考えよう」という方向だけを示すめあてに留まり、また、その提示の仕方も「めあてを書くので写しなさい」のように、一方的なものになっている場面にも出くわします。これで、子どもが「やってみたい」「おもしろそう」「勉強になりそう」と思うものになっているのでしょうか。子どもが関心をもったり、価値を感じたりする学習課題について考えたいと思います。

第2部「体育科運動領域の指導と評価－『指導と評価の一体化』の視点から－」

講師：辰巳 智則（教育学部教授）

学校に体育の授業があるのはどうしてですか？」「体育の授業で子供達はどんなことをしているのですか？」。このような素朴な質問が、地域の人々や児童の保護者から皆さんに投げかけられたと仮定します。その時、皆さんはどう答えますか？また、クラスのある児童から「先生、僕、走るのを頑張ったのに、どうして成績が良くないの？」との質問を受けたと仮定します。この時、皆さんはこの児童にどのように応じ、次の学習への希望を与えるのでしょうか？これらの問いについて、「指導と評価の一体化」の視点から一緒に考えていきましょう。

KiO 学びを結ぶオンラインセミナー R2.12.5

国語科の学習課題について考える

畿央大学 八木義仁

1

KiO

この展開にどこか問題があるでしょうか。

T：それでは、授業を始めます。今日のめあてを書きますから、ノートに写しなさい。

T：では、今日はこんなことをしてもらいますから、ワークシートに書いていきなさい。班で相談しながら進めていきましょう。

T：みなさん、できましたか。では、発表してくれる人。

C：・・・・・・・・です。

T：そうですね。みんな、よくできましたね。では、今日のまとめを書きますから、ノートに写しなさい。

T：みんなでまとめを読みましょう。今日はこんな勉強をしましたね。では、学習の振り返りを書きましょう。

C：楽しかったです。

2

KiO

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

中央教育審議会答申において、以下の三つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているかという視点。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「**見方・考え方**」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているかという視点。

文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 総則編』

「主体的な学び」のために

- まず，課題設定（やってみたい，ためになる）
- それをどう解決するのか，どのような結果が得られるのか，を考える見通し
- そして，課題に対する結果，それを通した自己認識の振り返り

昨年出会った文学的文章学習でのめあて

ずうっと，ずっと，大すきだよ（1年）

：いらないうちの理由を聞き合おう。

ゆうやけ（1年）：好きなどころと，その理由を発表しよう。

お手紙（2年）：どうしてがまくんはいいお手紙だと思ったのだろう。

かさこじぞう（2年）

：しかたなく帰ることにしたじいさまの気持ちを考えよう。

ゆうすげ村の小さな旅館（3年）

：美月さんは，何のためにゆうすげ旅館に来たのでしょうか。

世界でいちばんやかましい音（5年）

：王子様が変わったのはどこからなのか考えよう。

昨年出会った説明的文章学習でのめあて

アップとルーズで伝える（4年）

：段落どうしの関係を見つけ，7段落の役割について考えよう

千年の釘にいどむ（5年）

：白鷹さんの生き方から，どんなことが学べるか考えよう

「鳥獣戯画」を読む（6年）

：筆者の主張に対する説明が十分だったか交流しよう

「判断のしかけ」による学習課題 という考え方

解釈を問う学習課題《文学教材》

- ① どちらが〇〇か。⇒その根拠と理由は。
- ② どの程度か。どのくらいか。(スケーリング) ⇒その根拠と理由は。
- ③ 一番はどこ(どれ)(だれ)か。⇒その根拠と理由は。
- ④ どの順番か…。(順位は…) ⇒その根拠と理由は。
- ⑤ どんな音が聞こえるか、どんな色が見えるか。⇒その根拠と理由は。
- ⑥ どう読めばいいのか…? どう聞こえてきたか。⇒その根拠と理由は。

論理・関係性(つながり)を問う学習課題《文学教材》

- ⑦ どちら(どれ)が適切か。⇒その根拠と理由は。
- ⑧ 〇〇に、どの言葉を入れるのが適切か。⇒その根拠と理由は。
- ⑨ もしも、〇〇でなかったとしたら。⇒その根拠と理由は。

教材を「評価する」学習課題《文学教材》

- ⑩ いるか・いないか。(よかったか・よくなかったか) ⇒その根拠と理由は。

長崎伸仁ら編著(2017)「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題48

Which型課題 という考え方

「which型課題」確認読みレベル

- ① 〇〇は、Aか? Bか?
- ② 〇〇は、A~Cのうち、どれか?

「which型課題」解釈読みレベル

- ③ 〇〇として適切なのは、Aか? Bか?
- ④ 〇〇は、Aか? それとも、not A?
- ⑤ 一番〇〇なのは、A~Cのうち、どれか?
- ⑥ もしも〇〇だったら、A~Cのうち、どれか?
- ⑦ もしも〇〇の順位をつけるなら、その順番は?
- ⑧ もしも〇〇を目盛りに表すなら、いくつになるか?

「which型課題」評価読みレベル

- ⑨ 〇〇は、いる? いない?
- ⑩ いい文章? よくない文章?

桂聖編著(2018)「which型課題」の国語授業

単元の評価規準の作成のポイント

I. 目標と言語活動の設定



II. 評価規準の設定



III. 指導と評価の計画



IV. 評価の実際と手立ての想定

国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』p38を一部変更 12

単元の評価規準の作成のポイント

I. 目標と言語活動の設定

- ・ 「知識及び技能」の目標 「～できる」
- ・ 「思考力，判断力，表現力等」の目標 「～できる」
- ・ 「学びに向かう力，人間性等」の目標
「言葉がもつよさ～伝え合おうとする」
- ・ 言語活動例を参考に位置付け

国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』p38を一部変更 13

単元の評価規準の作成のポイント

II. 評価規準の設定

- ・ 「知識・技能」の評価規準 「～している」
- ・ 「思考・判断・表現」の評価規準 「～している」
- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準 「～しようとしている」
 - ① 粘り強さ〈積極的に，進んで，粘り強く 等〉
 - ② 自らの学習の調整
〈学習の見通しをもって，学習課題に沿って，今までの学習を生かして 等〉
 - ③ 他の2観点において重点とする内容
(特に，粘り強さを発揮してほしい内容)
 - ④ 当該単元の具体的な言語活動
(自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動)

国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』p38を一部変更 14

単元の評価規準の作成のポイント

III. 指導と評価の計画

- ・ 単元のどの段階でどの評価規準に基づいて評価するか

IV. 評価の実際と手立ての想定

- ・ 「おおむね満足できる」状況 (B)
- ・ 「努力を要する」状況 (C) への手立て

国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』p38を一部変更 15

「お手紙」における目標と評価（国立教育政策研究所に沿うと）

| 知識及び技能 | 思考力, 判断力, 表現力等 | 学びに向かう力, 人間性等 |
|----------------------------------|---|---|
| ○語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読することができる。 | ○場面の様子に着目して, 登場人物の行動を具体的に想像することができる。 ○文章を読んで感じたことや分かったことを共有することができる。 | ○言葉がもつよさを感じるとともに, 楽しんで読書をし, 国語を大切にして, 思いや考えを伝え合おうとする。 |
| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
| ・語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読している。 | ・「読むこと」において, 場面の様子に着目して, 登場人物の行動を具体的に想像している。 ・「読むこと」において, 文章を読んで感じたことや分かったことを共有している。 | ・粘り強く場面の様子に着目して登場人物の行動を想像し, 学習課題に沿って音読劇に取り組もうとしている。 |

16

「お手紙」における目標と評価

| 知識及び技能 | 思考力, 判断力, 表現力等 | 学びに向かう力, 人間性等 |
|----------------------------------|---|---|
| ○語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読することができる。 | ○場面の様子に着目して, 登場人物の行動を具体的に想像することができる。 ○文章を読んで感じたことや分かったことを共有することができる。 | ○粘り強く場面の様子に着目して登場人物の行動を想像し, 学習課題に沿って音読劇に取り組もうとすることができる。 |
| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
| ・語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読している。 | ・「読むこと」において, 場面の様子に着目して, 登場人物の行動を具体的に想像している。 ・「読むこと」において, 文章を読んで感じたことや分かったことを共有している。 | ・粘り強く場面の様子に着目して登場人物の行動を想像し, 学習課題に沿って音読劇に取り組もうとしている。 |

17

体育科運動領域の指導と評価 —「指導と評価の一体化」の視点から—

辰巳 智則
畿央大学教育学部

2020/12/5

学びを結ぶSOLS

1

問 1

1. 学校に体育の授業があるのはどうしてですか？体育の授業で子供達はどんなことをしているのですか？

→ 跳び箱を跳んだり、鉄棒を... でしょうか？
これらを卓越するため... でしょうか？

- ・ 各種の運動・スポーツは「目的」であり、「手段」でもある。
- ・ 教科の目標にどう記載されているのか。

2020/12/5

学びを結ぶSOLS

2

1) 体育科の目標¹

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
→ 知識及び技能 (わかる・できる)²
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。課題解決の仕方に関する知識
→ 思考力、判断力、表現力等 (工夫し、伝える)
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。
→ 学びに向かう力、人間性等 (まもる・親しむ)

註1：内容→活動(教材)→評価の間に
関連性や一貫性があること。

註2：運動の学習段階：認知→連合→自動化
わかる → できる

2020/12/5

学びを結ぶSOLS

3

1) 体育科の目標¹

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のおり育成することを目指す。

(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
→知識及び技能(わかる・できる)²

(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。課題解決の仕方に関する知識
→思考力、判断力、表現力等(工夫し、伝える)

(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。
→学びに向かう力、人間性等(まもる・親しむ)

註1：内容→活動(教材)→評価の間に
関連性や一貫性があること。

註2：運動の学習段階：認知→連合→自動化
わかる → できる

2020/12/5

学びを結ぶOLS

4

知識及び技能

- 技術は、「わかる」という形で習得される。
- 技能は「できる」という形で習得される。学習目標である技術がどの程度身に付いたかという能力を指す。
- 学習の初期(認知段階)は、技術の理解を促す指導が中心となる。それ以降(定着段階→自動化段階)は技能の習得を主として意図した指導のステージがある。
- 運動のコツという側面の学習内容があり、これを理解していないと教材(学習活動)の配列が難しい。
- 「技の要点(コツ)への気づきと共有」を図っていくことが大切。

2020/12/5

学びを結ぶOLS

5

1) 体育科の目標¹

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のおり育成することを目指す。

(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
→知識及び技能(わかる・できる)²

(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。課題解決の仕方に関する知識
→思考力、判断力、表現力等(工夫し、伝える)

(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。
→学びに向かう力、人間性等(まもる・親しむ)

註1：内容→活動(教材)→評価の間に
関連性や一貫性があること。

註2：運動の学習段階：認知→連合→自動化
わかる → できる

2020/12/5

学びを結ぶOLS

6

思考力, 判断力, 表現力等

- 思考・判断の最たるは工夫にある。その質は、場や動きの選択に現われる。
- 表現（工夫などの伝達）は、対話的な学びを促し、相互的で互恵的な学習にも繋がる。
- 記憶には、思考・判断を伴う**深い情報処理**（現象としては、試行錯誤の行動、トライ&エラーの姿に現われる）が不可欠！
- 課題となる技が新規であるほど、粘り強い取組が不可欠！

2020/12/5

学びを結ぶOLS

7

1) 体育科の目標¹

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のおり育成することを旨とする。

(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
→知識及び技能（わかる・できる）²

(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。課題解決の仕方に関する知識
→思考力, 判断力, 表現力等（工夫し、伝える）

(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

→学びに向かう力, 人間性等（まもる・親しむ）

註1：内容→活動（教材）→評価の間に
関連性や一貫性があること。

註2：運動の学習段階：認知→連合→自動化
わかる → できる

2020/12/5

学びを結ぶOLS

8

学びに向かう力, 人間性等

註：評価は、主体的に学習に取り組む態度

- 運動にはその特性に応じたルールやマナーがあり、安全な練習やゲームの組織・運営の仕方がある。
- 運動に親しむには、その特性に応じた楽しさや喜びを味わうと同時に、公正・公平、責任と参画、共生や健康・安全といった規範的な内容（態度）を育むことが不可欠！
- 仲間から伝達された情報の受け手側に承認的で思いやる態度がなければ、対話的な学びは成立しにくい。
- 運動を生活に連鎖させ、体力の向上を図れる人を育てるには、運動のもつ多様な楽しさに委ねすぎ、目先の感情を求めることは避けたい。

2020/12/5

学びを結ぶOLS

9

1) 体育科の目標¹

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
→知識及び技能(わかる・できる)²
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。課題解決の仕方に関する知識
→思考力、判断力、表現力等(工夫し、伝える)
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。
→学びに向かう力、人間性等(まもる・親しむ)

註1：内容→活動(教材)→評価の間に 註2：運動の学習段階：認知→連合→自動化
関連性や一貫性があること。 わかる → できる

2020/12/5

学びを結ぶOLS

10

授業の基本単位

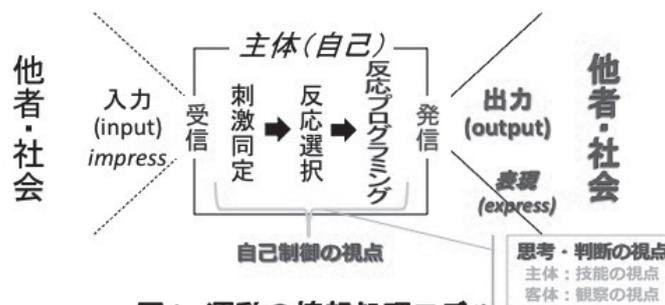


図1 運動の情報処理モデル (Schmidt (1991)を基に加筆)

2020/12/5

学びを結ぶOLS

11

2) 関係性を基盤とした自律的取り組み(相互性)

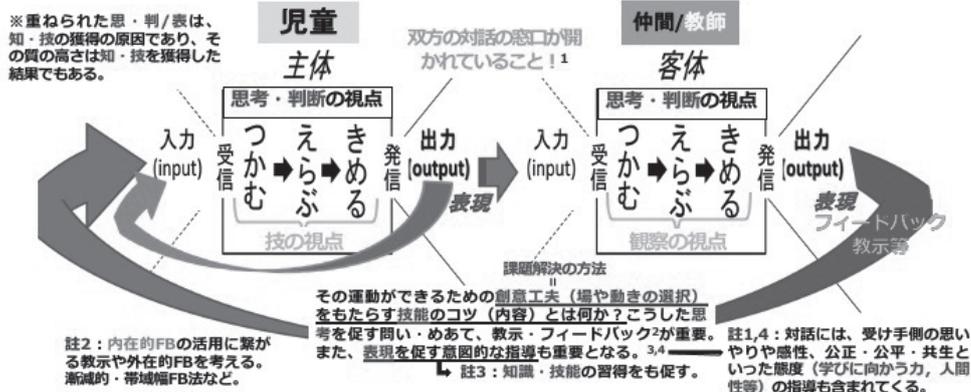


図2 学習深化の双方向因果・循環モデル

2020/12/5

学びを結ぶOLS

12

1 拒絶的態度は、関係性と自律的な思考・判断、出力、表現を抑制する

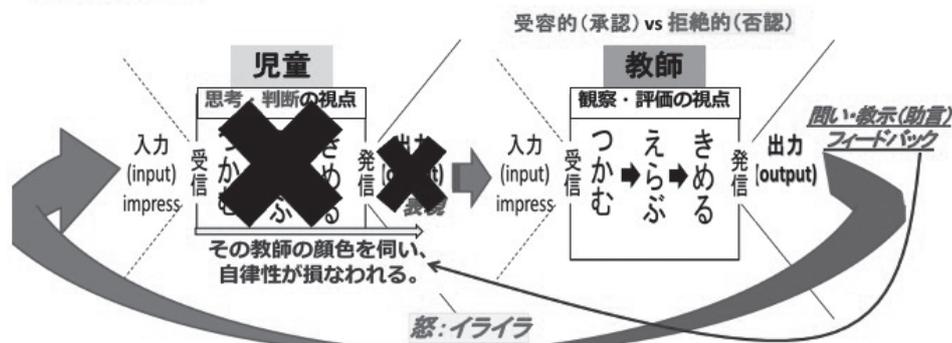


図3 学習深化の双方向因果・循環モデル

2020/12/5

学びを結ぶOLS

13

2 拒絶的態度は、過剰緊張を招き、出力・表現を抑制する

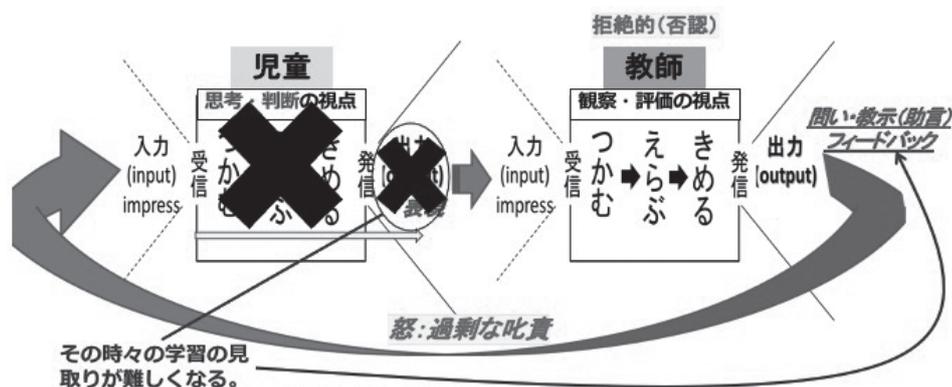


図4 学習深化の双方向因果・循環モデル

2020/12/5

学びを結ぶOLS

14

問 2

※成績が学習活動の基盤である「関係性」の揺らぎを生じさせているケース

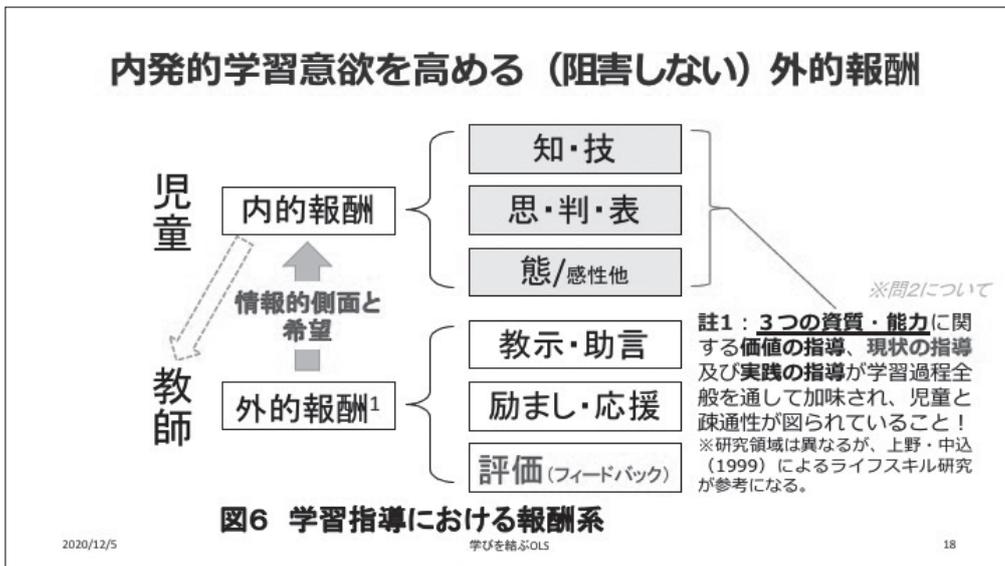
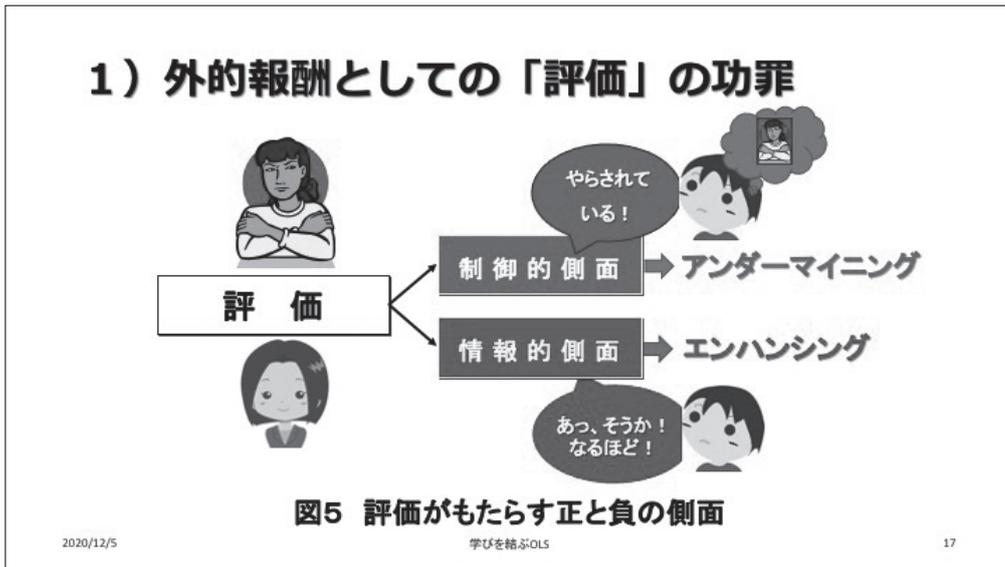
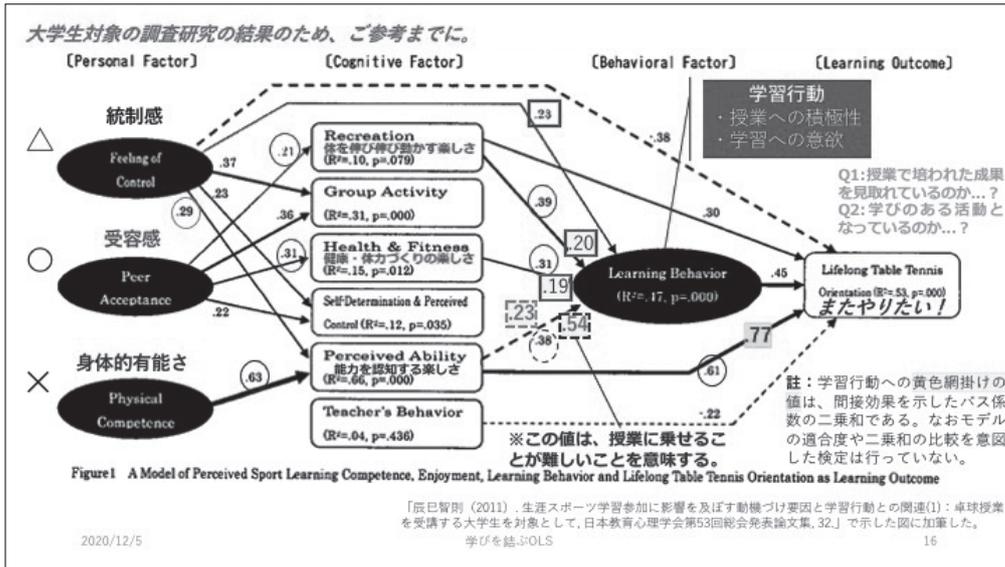
2. クラスのある児童から「先生、僕、走るのを頑張ったのに、どうして成績が良くないの?」との質問を受けたと仮定します。この時、皆さんはこの児童にどのように応じ、次の学習への希望を与えるのか?

- ・ 旧「技能」や「関心・意欲・態度」の観点で生じ得ていたこと。
- ・ 3観点の価値・現状・実践の指導が学習過程で加味されているか?

2020/12/5

学びを結ぶOLS

15



畿央大学現代教育研究所 主催

学びを結ぶ オンラインセミナー

～小学校学習指導要領改訂のポイントを踏まえた指導と評価の実際～

2020年

12月5日(土) 13時00分～14時45分

開催形式: ZOOMを利用したオンラインセミナー

参加費: 無料 / 定員: 各回先着90名

第1部
13:00～13:45

「国語科の学習課題について考える」

講師: 八木 義仁(畿央大学教育学部現代教育学科 准教授)



第2部
14:00～14:45

「体育科運動領域の指導と評価
—『指導と評価の一体化』の視点から—」

講師: 辰巳 智則(畿央大学教育学部現代教育学科 教授)



お申し込み方法

- ・専用申込みフォーム(下記QRコード)からお申し込み下さい。
申込期限: 2020年12月2日(水)
- ・ZOOMを利用したオンラインセミナーのため、メールアドレスが必須となります。
- ・開催前に参加用URLを申込メールアドレス宛に送信します。

【お問い合わせ先】

畿央大学現代教育研究所 TEL:0745-54-1602 (受付: 総務部)

※お送りいただきました個人情報は、本セミナー以外では使用いたしません。



Ⅲ 資料

プロジェクト研究Ⅱ「図画工作科授業における導入の在り方」に関わる資料として、客員研究員が令和2年度の学校再開後に実施したカリキュラムを紹介する。二学期末までの状況なので時間数に余裕がある。参考例なので学校名は省略する。

A小学校 第6学年 16人

○「落款づくり」(工作に表す：1時間)

自分が表現した作品に押すための落款をつくる。自分の名前の文字やイニシャルの形や並べ方のデザインを工夫し、3cm四方のゴム版の中に表した。

○「水彩画をかこう」(絵に表す：3時間)

多めの水で溶かした水彩絵の具が水を含んだ画用紙の上で他の色と混ざり合う様子や、含んだ水分量の違う画用紙に彩色すると、それぞれ違った感じになることを経験し、さまざまな夏野菜から表したいものを見付け、形や色を工夫して表した。

○「ここからみると」(造形遊びをする：4時間)

学校の中の風景に見られる形や色、遠近の関係などの造形的な特徴をとらえ、そこから自分の表したいことを見付け、奥行きを感じて楽しく見える場所を表した。

○「こんなところにいるのかな!？」(鑑賞する：4時間)

プロジェクト研究Ⅱ(2)感染症対策下の授業の実際③を参照。

○「固まった形から」(立体に表す：4時間)

布に液体ねん土を染み込ませて固めると、そのまま形をとどめるという特徴を知り、吊るす、引っ張る、ねじる、他の材料を組み合わせるなどして形を考え、固めた形ををいろいろな向きから見て捉えた形の特徴から表したいことを見付け、色を塗って表した。できた作品は作品のよさを感じる場所に置き鑑賞した。

B小学校 6年 34人

○「名前 de アート」(絵に表す：4時間)

自分の名前を、ひらがなや漢字、ローマ字などでデザインし、周りにはパチックを利用して様々な模様を考えたり、クレパスと水彩絵の具の色の組み合わせを工夫したりしながら名前を表した。

○「アートカードでアートゲーム」(鑑賞する：3時間)

教師用指導書付録のアートカードを用いたアートゲームを3回に分けて行った。1回目は、形、色、イメージを観点に共通点を見つけるマッチングゲーム、2回目は、画用紙に開けた小さい穴から見えるカードの部分を見て作品を考えるゲーム、3回目は、グループごとに学芸員さんになったつもりで観点を決めてカードの仲間分けをし、グループ間で紹介し合った。

○「“なにか”のすみか」(造形遊びをする：7時間)

校内で“なにか”がいそうな場所を探して写真に撮影をし、場所の雰囲気からどのような“なにか”がそこで何をして暮らしているかを想像し、生き物や道具などをつくり「“なにか”のすみか」をつくった。

○「ドリームプラン」(工作に表す：8時間)

「こんな学校があればいいな」という自分の学校の将来への思いから表したいことを見付け、身近な材料を活用して表した。アイデアスケッチをして交流することで思いを深めたり表したいことを具体化したりして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表した。

○「人権ポスター」(工作に表す：6時間)

自分にとって大切にしたい人権を絵に表した。ポスターを見る人たちに、自分の思いどう表現すればより伝わるか考え、言葉や言葉に合う絵や表現方法を、伝えたい相手を意識しながら工夫して表した。

C小学校 第5学年 33人

○「絵の具スケッチ」(絵に表す：5時間)

校内にあるジャングルジムや校庭にある樹、校舎の周りがある花などから表したい“もの”を見付け、簡単なスケッチで、自分で形を切り出した段ボール板に表す。休校期間中に家庭学習として課題としていた、絵の具やクレパスを使った表現方法を試すことを生かし、試していた表し方を使ったり、複数のスケッチを組み合わせ一枚の絵にしたりした。

○「使って楽しい焼き物」(工作に表す：4時間)

ひもづくり、いたづくりなど焼き物を形づくりための技法に出合い試しながら、器や花瓶、コップ、箸置きなど自分が使って楽しくなりそうなものを考え、表したいことを見付けて表した。

○「糸のこスイスイ」(立体に表す：6時間)

切ったり、切った板に切込みを入れて組み合わせたりした板の形の特徴を捉え、形から色や模様を考えるなど、表したいことを見付けて表した。大きくや細かくなど手の動かし方を試したり、切り進む感触を味わったりなどしながら、初めて出会う糸のこが生み出す形を楽しみながら活動した。※D小学校「糸のこドライブ」と同様の活動。

○「消してかく」(絵に表す：6時間)

白画用紙を黒いコンテで塗りつぶして、消しゴムや練り消しゴムで消してできた模様から見つけた表したいことを見付ける。表した線や模様から思い付いた色を加えたり、更にコンテで塗ったり消しゴムで消したりしながら表す。

D小学校 第5学年 33人

○「心のもよう」(絵に表す：4時間)

自分の心に感じる様々な感情を形や色で表すことを提案する。パスやコンテ、水彩絵の具を活用した表現方法を数例紹介し、その表現方法を組み合わせたり、新たな表現方法を考えたりしながら工夫し、自分が表したい感情を32切サイズの画用紙に表した。

○「絵カードを使って」(鑑賞する：1時間)

子どもたちが表現した「心のもよう」の絵カードをもとに、「この模様、私だったらこんな感情だと感じる」と友達の見方や感じ方を交流した。同じ模様でも自分とは違う見方や感じ方をする友達の反応を互いに認め合うことができた。

○「こんなところにいるのかな!？」(鑑賞する：4時間)

プロジェクト研究Ⅱ(2)感染症対策下の授業の実際③を参照。

○「ワイヤーアート」(立体に表す：6時間)

針金でできる形を見つけて指や用具の使い方を工夫しながら、立ち上げたい形を考えて立体的な形を表した。何かの建築物の形にするだけでなく、高さを追及する、針金を使うことでできる形の面白さを表すなど、表現の幅を保障するようにした。

○「糸のこドライブ」(絵に表す：8時間)

切ったり、切った板に切込みを入れて組み合わせたりした板の形の特徴を捉え、形から色や模様を考えるなど、表したいことを見付けて表した。大きくや細かくなど手の動かし方を試したり、切り進む感触を味わったりなどしながら、初めて出会う糸のこが生み出す形を楽しみながら活動した。※C小学校「糸のこすいすい」と同様の活動。

○「人権ポスター」(工作に表す：6時間)

自分にとって大切にしたい人権を絵に表した。ポスターを見る人たちに、自分の思いどう表現すればより伝わるか考え、言葉や言葉に合う絵や表現方法を、伝えたい相手を意識しながら工夫して表した。

畿央大学現代教育研究所
令和2年度 成果報告書

発行日 令和3年3月31日
編集・発行 畿央大学現代教育研究所
〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2
TEL 0745-54-1601 FAX 0745-54-1600
<http://www.kio.ac.jp/rime/>
e-mail : soumu@kio.ac.jp

株式会社アイプリコム
〒636-0246 奈良県磯城郡田原本町千代 360-1
TEL0744-34-3030 (代) FAX0744-34-3040

おしえ × まなび

畿央大学 現代教育研究所

令和2年度 成果報告書

Contact

畿央大学現代教育研究所 (<http://www.kio.ac.jp/rime/>)

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

TEL : 0745-54-1601/FAX : 0745-54-1600

MAIL : soumu@kio.ac.jp